

# JASIS

## NEWS

### No. 49

2012/3/23

## 日本インテリア学会会報

### ■新学会長として

#### 新学会長からのご挨拶

学会長 直井英雄（東京大学名誉教授）

この場をお借りして、日本インテリア学会の会長に就任したご報告と、本学会の実情、それに皆様と一緒に目指していきたいと考えている将来の方向について、私なりに思うところを簡潔に申し述べ、挨拶に代えたいと思います。

まず、就任のご報告。すでに皆様ご承知のように、本学会では、昨年、役員の変更があり、学会長も、初代の小原二郎先生、二代目の高橋鷹志先生の後を受け、三代目として私、直井英雄（東京理科大学）が選任されました。微力ではありますが、精一杯役目を果たしてまいりますので、どうかよろしくお願いいたします。

さて、本学会の実情ですが、創設が1989年、すなわち平成元年6月ですから、今年の6月で23年目を迎えます。初代会長の小原先生が、創設からしばらくの間、よく「まだよちよち歩きの学会だから」という言い方をされていたこと、また二代目会長の高橋先生が、20周年を迎えたころ「学会も成人したわけだから」という言い方をされていたことを思い出します。そういう成長の段階を経て、今や、年数からいえば、しっかりした中堅学会の仲間入りをしなければならない年齢になっているのだと自覚しなければならないと思います。しかし、残念ながら、会員数は500人前後と少数で、ここのところ、そうした大きな変化は見られません。むしろ、もっと小さな学会はいくつもあります。本学会も、会員数の点ではやはり小学会のひとつといわざるをえないでしょう。この会員数ですが、私は最近、本学会の位置に根ざした、あ

る意味、構造的な問題と考えるべきなのではないかと感じております。増やしたいのはやまやまですが、あまりじたばたするよりは、その現実を踏まえて将来を構想するほうが、むしろ建設的なのではないかと思えます。

最後に、この学会の将来の方向ですが、これも、私としてはきわめてオーソドックスに思い描いております。すなわち、この学会はインテリア分野唯一の学を中心にほかならないわけですから、そこからくるミッション（私は、インテリア分野における知の創造と普及、およびそれにもとづく社会貢献と考えております。これは大学とも一緒ですね。）を再確認し、その責任を着実に果たしていくことに尽きると考えているのです。具体的には、皆様と相談しながら進めてまいりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

### ■第23回インテリア学会大会概要報告

大会実行委員長 大森豊裕（近畿大学）

日 時：平成23年10月22（土）、23日（日）

会 場：近畿大学工学部

広島で大会を開催してはどうかという声が支部の中から出たのは平成20年の夏頃だったと記憶しています。その後23年の開催まで3年もあり、しっかりと準備が出来るはずでしたが、前回の広島開催からかなり年数を過ぎていたこと、何から手をつければよいか戸惑い、さらに時間的な余裕等々もあり、実行委員会を立ち上げたもののなかなか前に進まず。あっという間に過ぎてしまいました。

大会長を 森保先生にお願いし第1回の実行委員会で、開催校を広島工業大学、日程を研究発表会懇親会を1日目の22日、見学会を23日、大会テーマを「都市のインテリア」として準備を始めました。しかし、その後開催1年前に諸般の事情で、従来通りに見学会を初日の22日、研究発表会を23日に変更することになり、それに伴い会場も近畿大学工学部に変更になり、このことがその後いろいろと混乱をおこす原因となり皆様に大変ご迷惑をおかけする次第になってしまいました。

大会初日の見学会は、大会テーマの「都市のインテリア」の題材として尾道の空き家再生活動を通したまちづくりをご紹介しますと、尾道の街を歩いていただきました。途中で雨が降ったり、狭い坂道を上がったり下がったりで大変でしたが、尾道のまちを楽しんでいただけたのではないかと考えています。また、「猫の手」パンや、当支部の灰山氏作成の地図も好評であったと伺っています。

懇親会の会場は広島平和公園に近い、丹下健三氏の設計による広島文化交流会館内で行いました。旬の時期よりはやや早めでしたが、広島名産の牡蠣を焼いて召し上がっていただきながら、例年の様に各支部、研究委員会からの話題等に話が弾んでいました。

大会2日目は、開会式、論文発表、卒業作品展および審査、理事会、特別講演会、閉会式とスケジュールが続きました。

研究発表は4室、パネル発表1室で行われ、1室でノートパソコンおよびプロジェクターの不具合があり、すぐに対処したものの予定に遅れが生じ、ご迷惑をおかけすることになりました。

卒業制作展には 大学・大学院28名、短期大学1名、専門学校5名、高等学校1名の合計35作品の出展があり、直井学会長ほか6名で審査を行い優秀作品を選出しました。

特別講演会は、支部でここ数年共通のテーマにしていた「都市のインテリア」ということで、前会長の高橋先生にご講演いただきました。「環境行動的定義によれば、インテリアは内部外部共に存在する人の行動の周辺環境を指しており、公私の融合状態、都市空間でいえば歩道上で実現される行動様式とその環境であり、今日、障害物、不快物、不快な行動による都市のインテリアの浸食が問題となっている。」とお話の後で、ご自宅近くの張り紙だらけの街角に、「張り紙するな」との張り紙を貼ろうかとのこと。

久しぶりの広島での大会をともあれ無事にすべての行事を終えることができました。このことはご参加いただいた会員の皆様方のご協力をいただいたことをはじめ、実行委員の方々の熱心な活動、協力いただいた学生、大学の職員の皆様方に感謝申し上げます。

また、平成23年3月に東北大震災が発生し、大変な時期であったにもかかわらず、大会準備のご指導とサポートをいただいた学会事務局に感謝しております。

なお、詳しい記録は、中国・四国支部のホームページにありますので、是非ご覧いただきたいと思っています。

## ■第23回大会研究発表一覧

### A 論文発表部門

#### 【歴史1】

座長：長山洋子（文化学園大学）

001 戦後日本の主要木製家具メーカーの家具サイズ・レイアウトの変遷と間取りとの関係 — 一体型ソファ・セパレート型ソファ、ダイニングテーブルを中心として；新井竜治（共栄大学）

002 ジョージ・ネルソンのインテリアデザインにおける論評について ミッドセンチュリー・モダン・デザインに関する研究・その1；矢部仁見（帝塚山大学）

003 倉俣史朗のデザインに関する一考察 — 浮遊感と煌めきの背景にあるもの—；神田聡子（京都女子大学卒業生）・片山勢津子

004 萬来舎の空間構成の考察 — イサム・ノグチが創る空間の特徴—；西川由起（京都女子大学卒業生）・片山勢津子

005 大垣市藤江町・旧栄生楼の研究；清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）

#### 【歴史2】

座長：加藤 力（宝塚大学）

006 木内真太郎のステンドグラス — 旧伊藤伝右衛門邸、旧平賀義美邸—；金田美世（名古屋工業大学大学院）・清水隆宏・河田克博

007 ショール・ハウスとヴィラ・ピアの空間構成について — ヨセフ・フランクの建築作品における空間的特質に関する研究2—；八代美智子（名古屋工業大学大学院）・河田克博

008 軽井沢彫家具の成立および変遷過程—彫刻モチーフの変化を中心に—；南美慧（武蔵野美術大学大学院）

### 【歴史3】

座長：河田克博（名古屋工業大学）

009 マッキントッシュのファイアプレイスデザインの特徴 C・R・マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究（その12）；高橋敏郎（愛知淑徳大学）

010 今和次郎の考現学手法に関する研究 その1 1925年初夏銀座街風俗記録；長山洋子（文化学園大学）

011 モダンデザインの背景を探る アヴァンギャルドからステイタスへ その4 一雑誌 die neue linie にみるバウハウス；塚口眞佐子（大阪樟蔭女子大学）

### 【各種施設1】

座長：松本直司（名古屋工業大学）

012 オフィスにおけるコミュニケーションエリアの印象と使い方の関係；伊倉祥範（千葉工業大学大学院）・白石光昭

013 学校建築のインテリア環境を提案する専門家グループの活動；建部謙治（愛知工業大学）・木辺智子・河田克博・武田美恵

014 院内助産システムにおける空間の特性に関する研究 その1 産科医療施設における助産師の活動について；西山紀子（京都橘大学）・遠藤俊子・神崎光子・前田一枝

### 【各種施設2】

座長：建部謙治（名古屋工業大学）

015 アーバン・インテリアとしてのLRT停留所のデザイン分析；ペリー史子（大阪産業大学）

016 中国大連市と日本名古屋市における現代集合住宅の空間構成の比較研究；ソヘミン（名古屋工業大学大学院）・松本直司・文喆

017 集合住宅団地内の高齢者の居場所に関する研究（ふれあい場と敬老堂の事例調査）；金明鎬（東京大学大学院）・李鎔根・西出和彦

018 総合学科高校における校舎の整備特性と空間構成；孫錫毅（東京大学大学院）・西出和彦

### 【領域・空間】

座長：白石光昭（千葉工業大学）

019 高密度傾斜地住宅街の成立に関する敷地計画的考察／尾道く坂の街>にみる都市のインテリア（その1）；松尾兆郎（穴吹デザイン専門学校）・灰山彰好

020 細街路の類型に関する考察／尾道く坂の街>

にみる都市のインテリア（その2）；平田圭子（広島工業大学）

021 C. アレクサンダーのパタン・ランゲージで読み解く街づくり／尾道く坂の街>にみる都市のインテリア（その3）；灰山彰好（建築工房studio HAIYAMA）

022 子どもと空間－空間遊具の設計制作からワークショップまで－；北浦かほる（大阪市立大学）

023 住宅の生活動線シミュレーションプログラムの開発 その1 生活行動と歩数に関する予備調査結果と本調査の概要；飯塚洋平（AJS（株））・高橋正樹・井上淳・秋葉紀子・玉木麻耶・辻元渉・長山洋子

024 住宅における生活動線シミュレーションプログラムの開発 その2 本調査の結果と行為係数を用いた歩数シミュレーション；高橋正樹（文化女子大学）・飯塚洋平・井上淳・秋葉紀子・玉木麻耶・辻元渉・長山洋子

### 【住宅・生活1】

座長：小宮容一（芦屋大学）

025 タイの水上居住のしつらえと空間構成；津田英明（近畿大学）・松田博幸・大森豊裕・川原崇寛

026 ミャンマー・インレー湖の水上居住のしつらえと空間構成；川原崇寛（近畿大学）・松田博幸・大森豊裕・津田英明

027 テレビドラマにみる日本・韓国・台湾の住まいの比較；橋弘志（実践女子大学）

028 戸建て住宅の長期耐用性に関する考察 一建て替え訪問調査を踏まえた性能要件の検討－；中村孝之（積水ハウス（株））

029 平面計画の質的評価に関する研究（8）－戸建分譲住宅の平面計画に関する考察（2）－；横田哲（S I住宅研究）

### 【住宅・生活2】

座長：片山勢津子（京都女子大学）

030 超高層・高層マンションの居室面積計画の調査と考察－神戸市・西宮市を調査対象として－；小宮容一（芦屋大学）・井上徹

031 住宅における断面的ズレを伴う2居室の空間形状意識とその評価；青木一郎（名古屋工業大学）・松本直司

032 川の字就寝期の寝方に対応した住宅設計条件の検討；松本吉彦（旭化成ホームズ（株））・入澤敦子

033 住まいのしつらいに関する意識について 東海地方居住者を主対象とするアンケート調査に基づく一考察；永田恵子（名古屋工業大学）

034 狭小空間におけるインテリアデザイン；来海素存（神戸女子大学）

#### 【インテリア計画】

座長：上野義雪（千葉工業大学）

035 インテリア環境評価に関する研究 その1  
インテリア空間の環境評価システムの構築；加藤力（宝塚大学大学院）・村口峯子・茂木弥生子

036 インテリアアイテムが自律神経活動に及ぼす影響 ハーブの香りのリラクゼーション効果と応用；近藤雅之（積水ハウス（株））・中村孝之

037 住宅におけるライフスタイル提案型収納計画の研究 ー収納物の特徴と各室所有率ー  
河崎由美子（積水ハウス（株））・五十嵐ひとみ

038 被災地におけるダンボールシェルターの有効性についての研究；小切山孝治（工学院大学大学院）・大下祐樹・鈴木敏彦

039 デザイン系学科における実技科目の教育実践ー色彩構成の指導法に関する研究ー；山内一弘（大阪府立今宮工科高等学校）

#### 【人間工学1】

座長：西出和彦（東京大学）

040 すのこ状ウレタンマットレスの材料特性に関する研究；松崎元（千葉工業大学）

041 階段昇降者の足元と段鼻周囲に構成される機能寸法に関する一考察；太田成美（日本大学大学院）・若井正一

042 日常・非日常における階段用異形手摺の機能性評価に関する研究；小俣祐樹（千葉工業大学大学院）・上野義雪

043 2000年代にみられるいす・シーートの機能性評価；上野義雪（千葉工業大学）・穴沢舞・上野弘義

044 トイレブースにおける折戸と開戸の特性に関する研究 その3. 扉タイプ別の便器前方必要スペース；高橋未樹子（コマニー（株））・上野義雪

#### 【人間工学2】

座長：若井正一（日本大学）

045 インテリアデザインからみたUD施設としての空港における使用性評価に関する研究；芦田容子（千葉工業大学）・上野義雪

046 住まいと生活行為に関するアンケート調査 ー移動容易性と身体活動量を指標とした住宅評価プログラムに関する研究 その1ー；垂井健吾（独）建築

研究所）・吉村昌子・白石光昭・上野弘義・菅野泰史・布田健

047 日常生活の行動モニタリング調査 ー移動容易性と身体活動量を指標とした住宅評価プログラムに関する研究 その2ー；吉村昌子（大和ハウス工業（株））・垂井健吾・白石光昭・上野弘義・菅野泰史・布田健

048 生活行為の身体活動量と生体負担度ー移動容易性と身体活動量を指標とした住宅評価プログラムの関する研究 その3ー；白石光昭（千葉工業大学）・垂井健吾・吉村昌子・上野弘義・菅野泰史・布田健

049 動作取得及び表示方法の検討ーデジタル版人体動作テンプレートドローイングシステムの開発ー；布田健（独）建築研究所）・垂井健吾

#### B パネル発表部門

##### 【設計・デザイン】

座長：森保洋之（広島工業大学）

050 世紀末ウィーンのテキスタイルによる壁飾り；川崎弘美（パルナスインテリアルーム）

051 祈りの空間；早野由美恵（東北芸術工科大学）

#### ■第18回卒業作品展

日 時：平成23年10月23日（日）

会 場：近畿大学工学部

<巡回展>

日 時：平成23年11月2日（水）～11月5日（土）

場 所：タチカワブラインド銀座スペース

#### ■第18回卒業作品展出品校

<大学>

・昭和女子大学生生活科学部生活環境学科建築・インテリアデザインコース・拓殖大学工学部デザイン学科・武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科インテリアデザインコース・東京電機大学未来科学部建築学科・東京理科大学工学部第一部建築学科・日本大学工学部建築学科・愛知淑徳大学現代社会学部現代社会学部都市環境デザインコース・名古屋芸術大学デザイン学部デザイン学科スペースデザインコース・大阪産業大学工学部建築・環境デザイン学科・東京家政学院大学家政学部住居学

科・文化学園大学造形学部建築インテリア学科・神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科・福山大学工学部建築・建設学科・大阪市立大学生活科学部居住環境学科・広島大学工学部第四類建築設計研究室・広島工業大学環境学部環境デザイン学科・宇都宮大学工学部建設学科建築学コース・女子美術大学芸術学部デザイン学科環境デザイン専攻・日本文理大学工学部建築学科インテリアデザインコース・愛知県立芸術大学美術学部デザイン・工芸科デザイン専攻環境デザイン大学院美術研究科美術専攻デザイン領域・愛知産業大学造形学部デザイン学科建築インテリアコース・京都女子大学家政学部生活造形学科・名古屋工業大学工学部建築・デザイン工学科・近畿大学工学部建築学科（順不同）

#### <短期大学>

・共立女子短期大学 生活科学科生活アートコース

#### <専門学校>

・環境造形学園 ICS カレッジオブアーツインテリアアーキテクチャ&デザイン科・中央工学校 建築室内設計科・穴吹デザイン専門学校 インテリアデザイン学科・東京モード学園 インテリア学科インテリアデザイナー専攻

#### <高等学校>

・東京都立工芸高等学校 インテリア科

## ■第23回大会研究発表講評

### □歴史1

座長：長山洋子（文化学園大学）

001 は、コスガの総合カタログからソファレイアウトおよびダイニングテーブルのサイズの変遷を考察したものである。ソファはセパレート型から一体型へ、レイアウトは対面型・L字型から直列型配置へと移行した。その要因を集合住宅ではリビングルームがパーソナルオーディオルーム化した事と、建築設備の変化（家具搬入エレベータ・階段・各戸住居の玄関ドア・室内ドアの大型化）だと指摘した。また、ダイニングテーブルの大型化の要因はダイニングキッチンから空間分化された事とした。既往研究で4社のカタログ調査から一般化できたため、本研究ではコスガ1社を取り上げたとしたが、今後はさらに客観性を持たせていくことを期待する。

002 は、ジョージ・ネルソンを通してミッドセンチュリー・モダン・デザインの理解に別の視座を加える試みである。ネルソンは著書でインテリアデコレイターは真の意味でモダン・デザインを理解せず、単なるスタイルとして消費しているだけであると批判した。主の思考や

活動が無意識的に表現されたものこそが人の共感を得るものだとして、イサム・ノグチのニューヨークスタジオを、真に現代的なインテリアデザインであると評価した。ネルソンはデザインを取り巻く社会の問題を見据え、どのようなデザインをするのかという論点を超え、デザインとは何かにまで言及していたとまとめた。細部にわたるこの研究は興味深い。今後の展開に期待する。

003 は、倉俣史朗の店舗デザインを中心に、空間表現の特徴からデザイン手法とその背景にあるデザイン思想について考察した。倉俣デザインを特徴づける最も大きな要素は「浮遊感」であるとし、ガラス、プラスチックなど透明素材はその重要な役割を担っている。視覚が感情に与える効果も機能性であるとし、視覚的感覚的に美しいデザインを追求し「浮遊感」を自由への願望表出、重力からの解放と捉え、連綿と表現し続けたとした。制約にとらわれず原風景から得た感覚とストイックな制作態度が、特有の「浮遊感」を生み出したのではないかとまとめた。新たな切り口から、さらに倉俣史朗デザイン論を展開して欲しい。

004 は、イサム・ノグチにおける空間表現の特徴を慶応義塾大学「萬来舎」から読み解く試みである。彼の作品を3期に大別し、1期は彫刻中心、2期は公共モニュメント舞台装置家具インテリア、3期は公共庭園とした。「萬来舎」は作品の幅が広がる2度目の来日期の作品で、西洋と東洋の融合を意識的に目指すようになった時期である。床、壁、天井の空間の特徴と彫刻との関係を読み解き、空間構成軸を用いて解説した。インテリア設計では、彫刻を役立つものにしたいという思い、あかりに関する関心、空間への試みが結実してみられるとした。イサム・ノグチの空間表現についての更なる研究を期待する。

005 は、岐阜県大垣市藤江町「旧栄生楼」の調査から建築的特徴を考察した。建物構成は対象地域の典型的な貸座敷の特徴であるとし、内部空間では各部屋の入口に庇を付けて各々の部屋を独立した建物に、廊下を路地に見立てるなど、他の遊郭建築にもみられる特徴が見出された。室内の欄間は直線、緩やかな曲線など部屋ごとに異なる意匠で、とくに二階客間の欄間は仰向けに横たわる裸婦の姿であり、これは他に類を見ない奇抜な意匠である。正面外観は威厳あるイメージ、建物の中は非日常の遊びの世界へと変化させる効果は十分発揮されていると評価した。今後も歴史的建築の保存と解明を期待する。

### □歴史2

座長：加藤 力（宝塚大学）

006 日本近代建築におけるステンドグラス製作で活躍した木内真太郎の業績について旧伊東伝右衛門邸と旧平

賀義美邸を研究対象として、取り上げた研究である。まず、木内家に残された金銭出納帳の記録から、これらの作品が木内真太郎の製作したものであることを推測した点が新たな知見となっている。しかし、それは未だ確実な証拠にはなっていない。次いで、ここでは2つの邸宅に残された木内の作品の特徴を取り上げている。特徴やその関連性は確かに存在しそうだが、これも木内のさらなる作品の発見や検討、あるいは他者との比較とその特徴抽出により、より確かなものと実証されよう。ここでも今後の課題である、とまとめている。まだまだ、ご苦労な探求作業と地道な考究が続く。たとえ近代でも歴史学は大変だ。

007 発表者はオーストラリア出身のインテリアデザイナーでもある建築家ヨゼフ・フランクをずっと追いかけている研究者である。ここでは彼のウィーンに建つ2件の初期の住宅作品の空間特質に迫っている。規模も平面構成も全く異なる建築作品であるが、概観は共に閉鎖的矩形（インターナショナルスタイル）であるが、内部はともに垂直の豊かな空間性に溢れていることを指摘している。ヨゼフ・フランクの時系列的変化とそれがどのような要因による影響かなどをおそらく今後、提示していくであろうが、楽しみである。

008 軽井沢彫家具という存在があることを初めて知った。避暑地で外国人などに用いられ、伝統的な日光彫に強く影響を受けたと言われる。だが、汎用性も乏しく、大火の影響もあって幾つかあった工房も無くなり、現存するものは極めて少ないという。それに同じ信州でも、松本民芸家具のようなインパクトがない。それはデザインという「関門」を通過してこなかった為であろうか？いずれにせよ、この家具の持つ位置付けやその意味についての明確化が求められよう。

### □歴史3

座長：河田克博（名古屋工業大学）

009 は、C・R・マッキントッシュのインテリアデザインに関する一連の論考で、今回は、マッキントッシュのファイアプレイスにおけるデザインの特徴を考察している。具体的な作品例を説明した後、結果としてのファイアプレイスデザインの変遷を、①1898年～1901年頃までは、モルタル塗り本体に木製ウォールパネルなどの取り付けや金属パネルの嵌め込みなどが施され、②1902年～1908年頃の時代は、正方形タイルなど、タイルにこだわっている傾向があり、③1911以降は、雷紋模様など幾何学的装飾を加えている、と手法を3期の時期に大別している。そして、②の手法はマッキントッシュの建築・インテリアでは少なく、タイルの使用が幾何学的なデザインへのきっかけの一つとなったと推察している。ファ

イアプレイスデザインの作風変化を編年的に整理した、歴史的に意義深い考察といえよう。

010 は、今和次郎の考現学手法に関する研究の第1報で、1925年初夏銀座街風俗記録と題した考察である。工学院大学図書館に収蔵された今和次郎の膨大な研究資料のなかから、上記の記録について、考現学ノートおよび調査カードを多角的視点で丹念に分析したものである。会場から、分類の方法を如何に決定したのか、との質問があり、実際を見ながら即興でやったと思われると回答した。そして今和次郎は、こうした調査を面白く正しく行っていることを強調した。なお今回は第1報であるが、最終的な研究の行き所についての質問があったが、現段階ではなお未定の部分があり、今後の研究動向が着目される論考であった。

011 は、モダンデザイン成立の背景を、「アヴァンギャルドからステイタス」へと題した第4報で、家庭雑誌 *die neue linie* とバウハウスの関連を考察したものである。そして、この雑誌の表紙・ロゴなどのデザインがバウハウス出身者によって行われ、記事内容もバウハウスとのコンタクトに影響されたと指摘している。結果的に、この雑誌は、過激な革新でもなく旧態の保守でもない二股戦略を取り、豊かな教養ある層をターゲットにして、モダニズムの流布者としての役割を果たしたと考察する。モダンデザインが普及していった過程を、歴史的な一側面から分析した興味深い論考であるが、梗概集の文章はいささか冗長であり、図版なども入れ、要点を浮き上がらせるべく整理すると、読者によりの確に論点が伝わるものと思われた。

### □各種施設1

座長：松本直司（名古屋工業大学）

012 は、内装から連想される使い方をもとに、オフィスにおけるコミュニケーションエリアのインテリア計画条件を得ることを目的にしている。調査は、コミュニケーションエリアの写真の印象を、学生とオフィスワーカーのそれぞれに評価し、さらに連想される使い方を記述してもらい、結果として、学生とオフィスワーカーの評価傾向を分析し、印象評価と、使い方イメージとの関係を求めている。著者も述べているように、印象や使い方イメージをもたらす物的要因についての分析が今後の課題と言える。

013 は、改修を必要とする小学校のインテリア環境について、専門家グループの提案活動を記録、提案内容を分析するとともに、教員の改修意識を明らかにすることを目的として教員アンケートを実施し、学校のインテリア環境の問題点を明らかにしている。活動記録と教員意識を求めるといふ複数の目的に対して、紙面が少ないこと

もあって、十分に分析結果が記述されていない印象があり、しっかりした組織のもとでの研究であり、今後しかるべきところへ全容の発表がなされることを期待される。014 は、病院内の助産システムに関する空間特性を求め、その要求機能を抽出することを目的としている。調査は助産師へのインタビュー調査で、自由発話により、保健指導、介助、リスク管理、分娩立ち会い、授乳指導、などに関する行動や心理を求めている。抽出された要求機能は分類され、結果として、助産師が妊産婦や家族が望む形でのお産を実現しようとしていること、ケアに多くの問題点があること、などを明らかにしている。今後褥婦への調査を考えており、さらなる進展が期待される。

## □各種施設2

座長：建部謙治（名古屋工業大学）

015 はヨーロッパ諸都市のLRT停留所のデザイン的特徴を分析したもので、それぞれの街による工夫があり、個性的なシンボリックなデザインがみられることを示した。

016 は名古屋市と中国大連市の現代集合住宅との空間構成の比較をしたもので、内容的には深いがまとめがなく、発表者自身の研究内容への理解度が十分とは言えなかった。

017 は日本と韓国での集合住宅地内の高齢者の居場所を比較・考察したもので、比較事例が少ないので今後に期待したい。

018 は総合学科高校における校舎整備と空間構成を明らかにしようとしたもので、生徒の居場所に問題があることが指摘された。なお、セッションが終わらないのに発表者が不在であったことは注意を促したい。

## □領域・空間

座長：白石光昭（千葉工業大学）

019～021 は本大会の特別講演のテーマに合わせ、「都市のインテリア」との視点から、開催地周辺にある尾道を対象とした連題の発表である。

019 は、尾道の特徴の一つである高密度傾斜地住宅街を対象に計画的側面の特徴について考察している。しかし、計画的な側面はあまりなく、「斜面に適当な平地地を見つけ」との開発経緯が明らかになったとのことである。

020 は、人に好ましい印象を与えている細街路の空間構成を対象に、人と細街路との関りを明らかにしようとするものである。坂の町部分から特徴的な街路部分を取り上げ、五感に訴える好ましさの原因について考察し、整理している。

021 は、パタン・ランゲージで提案されている253項目

のキーワードを筆者の視点で再構成し、ケーススタディとして尾道を対象とした考察を行っている。

尾道は25項目のパタン・ランゲージが該当すると判断し、尾道の魅力の客観性を指摘している。質問では、これをさらに街づくりの実践に展開する予定についての質問があった。

022 は、卒業設計を通じて、子供の空間行動や空間認知能力を実体験させ、教育効果を高めようとするものである。学生が製作したのは、幼児を対象とした壁と家具ユニットで構成される段ボール製の空間遊具である。1～2歳児と4～5歳児では遊び方が異なることが理解でき、学生は子供の行動に関心を持つようになったとしている。通常授業の課題でも可能かとの質問が発表者にあったが、卒研の方が望ましいとの回答であった。

023～024 は、住宅の間取り評価を目標とし、生活動線をシミュレーションできるプログラムの開発のための基礎実験である。主婦20人を対象に住宅内での歩数調査を行った結果、床面積よりも住宅内で過ごす時間の長さが歩数に影響しているとしている。また、主婦3人に対し、1分ごとの歩数調査、詳細な行動記録を行い、主婦の行動を詳細に記述している。

その結果をもとに、部屋間距離の情報、1分ごとの「行為の内容、時間、場所」を設定することで、実態に近い生活動線と住宅内総歩数がシミュレーションできるとしている。なお、質問には「動きの質」に関するものがあつた。

## □住宅・生活1

座長：小宮容一（芦屋大学）

025 は、タイの2種の水上住宅形式について、その居住のしつらえと空間構成を報告したものである。一つはバンコクの杭上住宅（ピラーハウス）、今一つはピサヌロークの水上住居（フローティングハウス：船や筏の上に建つ）である。住宅の規模、建築材料、電気と水道、住まい方について詳細に報告した。ものと空間の関係の分析ではあるが、水上生活、水上住居であることでの特徴や必然性の分析と言及が、またピラーハウスとフローティングハウスでの住まい方の共通性や差異についても深い分析が望まれる。更に調査期間が2001年2002年と約10年前と情報としては過去事例であり、2011年10月の大水害を考えると、速い機会に再調査が行われ、時系列的な生活とインテリアの関係が明らかにされることが望まれる。

026（川原他3名）は、ヤンマーのインレー湖の高床式水上住居の居住のしつらえと空間構成を報告したものである。湖にまるで計画された様に整然と水路と住居が建ち並ぶ様は、川原氏の説明では、村長の仕切りとのことである。住宅の規模、建築材料、電気と水道、住まい方

のついて詳細に報告した。水との関係は、トイレ、調理などの排水は湖に直接であり、台所やテラスでの作業との関係が示された。塵も掃き出し穴から湖へ直接で水質汚染も示された。就寝のしつらいや位置関係も示された。報告としては概ね理解できる内容であったが、今後は、室内気候（湿度、温度、気流等）などの調査により水上住居の有用性に関する結論が出ればより有効な研究になるのではないと思われる。

027 は、共通の原作に基づいて、日本・韓国・台湾で制作されたドラマを対象として、場面の空間と人数、個室の使われ方、LDの使われ方、住宅プランの4項目を数量的に分析、比較、その中から3国の住い方の差異あるモデルを導きだした。数量分析は順当で明快である。プランはテレビ映像から導きだしたもので、発表者の想像も有ろうかと思われるが、結論はそこになく、個室のあり方、LDと個室の関係、個人生活、家族生活、他者とのコミュニケーションの有り方であった。日本の住いが個室の独立性が強い、韓国の住いは家族ぐるみの生活がLDで行われる、台湾の住いは個室とLDが開かれた関係であるとした。集計からの順当な分析と結論であった。しかし今発表が「テレビドラマのみ」と但し書きがあるように、その範囲内での結論であり特殊解である。示唆に富んではいるが、一般解・普遍解とするために、3国現地でのフィールドワークでの検証が望まれる。

028 は2008年の住宅のストック数の内約7割が新耐震後であると指摘し、その長期耐用住宅への活用を問うた。まず戸建て住宅の建て替え要因を「物理的要因」「機能的要因」「心理的要因」とした。物理的要因（建物・部材の老朽化、構造的な不安）は定期的診断と適切なリフォームで長期耐用住宅が可能となるとし、これを生産者側で担保すべきとした。次いで長期耐用性能のアイテムをメンテナンス性、耐久性、柔軟性、恒久性とし、更新するもの、更新しないもの、定期維持管理、価値再生推進、初期性能確保などの相関を示した。それらの相関を解決・確保することによって長期耐用住宅が可能とした。順当な論理展開であるが、RC造の集合住宅と異なって戸建て住宅では供給者・生産者と管理者、居住者の関係性が整っていない現在では、理論は理論として、現実に落して行く方法を考案しなくてはならないであろう。今後の展望として戸建て住宅のS&Iシステムを示したが、木造、鉄骨造、鉄骨ALC造などが、スケルトン性能を持つための素材性能、構造、工法などの解決策の探求に研究が進むことを期待したい。

029 戸建て分譲住宅の平面計画において分譲事業主（区分：大手、中堅、地場）にその内容に棲み分けがあるかを研究したものである。分譲地規模、分譲価格、分譲土地面積、延べ床面積については大手と地場の棲み分けがあったとした。駐車台数、家族構成対応については棲

み分け不明瞭とした。個室数では4室は大手、3室は中堅・地場の比率が高いとし、階数では3階建てでは中堅・地場のみを報告。平面計画ではゾーニング、部分空間、収納について棲み分けを分析した。今回の研究発表は分譲事業主の棲み分けにとどまったが、発表者の本来の「平面計画の質的評価」に戻って、分譲事業主毎の典型平面計画を取り上げ、質的評価の比較研究を望みたい。

## □住宅・生活2

座長：片山勢津子（京都女子大学）

030 2010-11年の超高層・高層マンション計12棟の部屋数と面積を対象に特徴を考察している。特徴をより明確にするために、独立住宅との比較を行い、一般的な核家族を想定して検討を行い結論づけている。今後、居住者特性や住まい方の考察へと展開を期待したい。

031 断面ずれを伴う居室空間の物的形状の違いと、人の空間形状意識の関係から、上層居室と下層居室の関係を明らかにすることを目的とした研究で、模型映像を使用して実験を行っている。結果から、ズレ高さ600mm、上層居室が3,600m以上の空間が特徴を生かした空間と結論づけている。

032 ハウスメーカーの居住者を対象とした調査から就寝形態や寝具、親の就寝時間の実態を踏まえた上で、訪問調査を行い、就寝時の問題を解決するための方策を提案したものである。具体例として、川の字就寝の際の問題点を解決するために、主寝室と子ども室の事例が紹介された。

033 住まいの室礼に関するアンケートの調査報告で、対象者は愛知県内の大学と専門学校で建築・インテリアを学ぶ学生とその関係者である。調査結果から、住まいの室礼を盛んにし満足感をあげるためには、各世代が室礼による見た目と精神の満足を体験する機会を増やすことが必要としている。

## □インテリア計画

座長：上野義雪（千葉工業大学）

035 本研究は、インテリア空間における生活者の住まい方や人間行動を含めた総合的な環境評価の必要性を前提に、実行・評価するための評価手法の構築について論じたものである。この構成要素をインフィル、インテリアエレメント、インテリア設備に分類し、空間用途について住宅をはじめとして5つに、管轄団体を国際系、自治体系を含む6つに分類した。そして住宅のインテリア空間を対象に評価内容を6つに分類し、評価システムの構築を試みている。具体化に向けて専門家、団体による取り組みの必要性を説いている。空間における取説の必

要性を質問者から提示されたが、対象とする生活者の区分けが今後の課題の一つになるものと考えられる。建築とインテリアのすみ分けからしても重要な課題であることから、今後の検討に期待したい。

036 インテリア空間においてハーブの香りがリラクゼーションに果たす役割について調べた実験報告で、ストレスを感じた時にタイミングよく香りを得ることにより心理的にリラックスすることが明らかになった。しかし、その評価項目等の明記は特にない。匂いの発生は機構的には容易であっても、匂いの発生を即時に抑制することは難しい。匂いの急な遮断方法の検討も将来的には欠かせないものと考えられる。また、刺激としての香りの強度をどのようにとらえるか、今後の研究に期待したい。

037 本研究は、住宅におけるライフスタイル提案型の収納計画を実践するために143品目の収納物について、所有率や収納場所、収納に困難な物品などを調査したものである。収納率を60%以上、10~60%などによりコア収納物、生活行為収納物など収納物を4種類に分け、空間別に所有率を調べた結果、コア収納物、生活行為収納物、ライフスタイル収納物などの収納場所確保の必要性を説いている。収納物は、地域性、家族構成、職業、趣味などにより所有状況が異なるものと考えられるため、これらの要素をどのように包含するか、また、時間軸で捉えることが具体的提案に結びつくものと考えられる。

038 本研究は、本年3月11日に発生した東関東大震災を契機に被災地の避難所におけるプライバシー確保のための試みとして、段ボール製シェルターの提案を試みたものである。提案にあたっては、気仙沼市の中学校においてヒアリング調査を行った結果、プライベート空間の確保、視線・音環境の改善、着替えや授乳などの共用空間の設置などの要望があげられた。提案のダンボールシェルターは、少ない部品数で構成され、組み立て並びに撤去が容易に行えるなど、避難所の環境改善に有効であると結論付け、引き続き家具の追加を検討中である。避難所は、限られたスペースでパブリックとプライベート空間の両立を必要とする場であることが、プライバシーの確保を難しくするものと考えられる。日本インテリア学会では、被災地に対する支援の組織化を決議したが、今後の研究・実践に向けての努力を期待したい。

039 本研究は、高等学校デザイン系学科の生徒に色彩構成の基礎から応用まで分かりやすい授業実践のための指導方法として、組みひもの技術を応用した教育法の実践について報告したものである。混色の理解性向上など、本試みは色彩の構成能力向上に有効である可能性の確認をより確かなものとなりつつある。キーホルダーを題材に組みひもによる色彩構成の体験は、生徒自身が関心を持って課題研究に参加できることは、コンピューターや絵具などによる着彩とは大きく異なり、新たな

色彩構成の教育法として、教育の現場において根付くことを期待したい。

## □人間工学1

座長：西出和彦（東京大学）

040 は、すのこ状に加工したウレタンフォーム材料の敷き寝具としての性質として、体圧分布、表面温度、入眠時の温湿度変化、沈み込み量について検証した。これに対して枕の条件が重要だという意見があった。

041 は、階段昇降時の被験者のつま先および踵の移動位置から、足元と段鼻周囲に構成されるアキ寸法と蹴込み寸法を計測した。勾配による違いは、踏面寸法の違いによるものではないかという意見があった。

042 は、異形手摺を含めた形状の異なる階段手摺の使用性を評価し、直棒に近い形状で、手摺に連続性があり勾配の影響を受けず、手摺のどの部分でも手をかけられる形状をもち、時には手を摺って使用できることが手摺に求められる要件であるとした。

043 は、2000年代に生産されたいす・シートについて人間工学の立場から人体系家具としての機能評価を行い、座り心地を犠牲にしたものづくりがあるという現状の問題点や改善点を明らかにした。

044 は、公共トイレにおける折戸、開戸それぞれに応じた有効的な使用環境を把握するための一連の研究の第三報で、便器や壁を設置した空間での必要スペースを明らかにした。取手の操作についても配慮すべきとの意見があった。

## □人間工学2

座長：若井正一（日本大学）

045 は、空港施設の国際線ターミナルを対象にして利用者の視点からアクセスや設備機器などの使用性評価を行い、その問題点や改善点などを考察した。現状のユニバーサルデザイン（UD）に対して「使用者側から～人間工学をもとにインテリアデザインの立場から配慮する必要がある」と、特記した上で、評価結果を点数化したことなどが注目された。当該発表に対して、従来のUDの考え方との違いについての質疑があった。

046 は、移動容易性と身体活動量を指標に用いた「住宅評価プログラム」を提案することを目的とした一連の研究報告（本篇を含めた以下3篇）である。本篇では、住まいと生活行為に関するアンケート調査を行い、136世帯の138名から得られた結果を報告している。主な設問は、住宅を購入する場合に重視する基本性能、普段の生活行為に関する事項などであった。その結果、重視する基本性能では、耐震性や価格が多かったことや、大切

にしたい生活行為では、睡眠、くつろぎ、食事等が多かったことなどを男女別、世代別に比較検討した。

047 は、前報の内容に引き続き、住宅内における家事等の行為が身体活動量に与える影響を把握するために行動モニタリング調査を行ったものである。本篇では、実際の日常生活における行動アンケート調査および高齢者を対象にした簡易活動量計による総活動量の測定結果について比較検討した。今後、被験者が居住する住宅の間取りの違いとの関係性などについて、研究の進展に期待したい。

048 は、前報および前々報に引き続き、住宅内における生活行為の基本的な身体活動量や負担の程度を検討するために、酸素消費量をもとにしたエネルギー消費量や心拍などを実験的に計測したものである。

その結果は、身体活動量の比較がMETs値を、心拍による評価がPSB値（周波数分析）を指標として生活行為を比較検討している。以上3篇は、新たな「住宅性能プログラム」を提案することを目的に、日常生活行為に関する幅広い調査や、高齢者などを対象とした生体負担に関する実験を通して多角的に把握しようとしている点を評価したい。

049 は、多様な人の動作をデジタルテンプレートとして描いたCADデータにして活用できるシステム開発に係る一連の研究報告である。本篇では、特にモーションキャプチャを用いた動作取得の概要や独自に開発してきた「デジ典Viewer」のこれまでのバージョンアップの変遷などについてまとめたものである。まとめの中で、動作の標準化やタイプ分けには、被験者の動作軌跡などにバラツキがみられ、一般化することの難しさを指摘している。今後、本システムが、インテリアなどの設計場面において幅広く活用されることを期待したい。

## □設計・デザイン

座長：森保洋之（広島工業大学）

050 は、川崎氏の発表であった。インテリア空間の質を向上させるために、世紀末にウィーンにてデザインされ、現在、復刻生産されているコロマン・モーザー（1868-1918）によるテキスタイルのうち、《神託の花》の文様を実際に使い、複数のパネルの合体により、様々な造形パターン、例えば、「単純な合体」「隙間ある合体」「積み重ね合体」「ドレープある合体」等々の新たな手法により、壁飾りを実際に制作するという、実物大のデザイン提案である。このように、様々な造形、配色により、インテリアエレメントとして、壁飾りを生まれ変わらせている点が本パネルの特徴といえる。この発表に対して、次の質疑があった。①日本の壁紙についても展開可能であり、それらを実際に使ったところを見せて欲

しい。②椅子の張り地について、トーネット社とバックハウゼン社との関係を調べてみるとよい。③「ウィーン工房」と、アーツ&クラフツ運動、その先導者：ウィリアム・モリスの活動との関係の有無・程度について調べてみるとよい。等々であった。

051 は、早野氏の発表であった。埼玉県の久喜市の某寺院境内に、六角形の薬師堂の建築設計・監理を依頼され、その御堂を、心安らぐ、祈りの空間として、学生とのコラボによりデザインし、実現したものである。御堂の上面に、ぐるりとアクリル板に12神将の梵字を中心とした絵を書き上げ、そうしたスタンドガラス風の絵画作品を内部装飾に使い、光が交錯・変化する祈りの空間にした点に特徴がある。新しい素材の検討、統一レイアウト作成、スケッチ、絵合わせ、特殊絵の具の検討・選択、学生とのコラボの内容、等々について説明がなされ、本パネルに対して、次の質疑があった。①六角形の意味は？ ②素材の選択によるアクリルの設定と費用等の実際は？ ③普通の使い方は？ ④製作過程が教育そのものである。⑤新しい試みといえる。⑥法隆寺の八角円堂である「夢殿」は、ぐるりと回りながら、書物を見、読む空間であると、ある国文学者がいっていた。この御堂は六角形であるが、御堂の上面に、ぐるりとアクリル板に絵を書き上げたことは、その意味からみて、一つの形式といえよう！ 等々であった。

総じて、熱心な発表・質疑の風景が、発表会場に満ちていた。進行役（座長）として、前向きで真摯な雰囲気に、大きく感動した次第である。

## ■平成23年度運営委員会だより

### □総務委員会

上野義雪 委員長

今年度は、役員改選実施の年にあたり、一部支部による評議員選挙の遅れが、総会開催を大幅に遅れさせる結果になりました。また、新年度からの役員や組織、事務局移転など、会員への周知が会報発行の遅れにより、会員への情報伝達にも大きな影響を与えることになり、ここに伏してお詫びを申し上げます。

総会の議事については、理事会議事録にお目通しをお願いいたします。今後、会員への情報発信については、広報委員会組織の見直しを含め、事務局移転と並行しつつ対応を検討しております。

日本インテリア学会第23回大会は、広島県地、近畿大学工学部を会場に開催され、多くの会員参加により、無事幕を閉じた。関係された皆様方には衷心より御礼を申

し上げます。

懇親会当日、大会会場の近畿大学にお邪魔をいたしました。会場校の大森先生、松田先生を中心に10名ほどの学生さんが黙々と準備にあたっており、この姿に大きな感動を覚えました。それは、協力体制を無意識うちに保ちながら、無駄のない動きや自らの判断で準備をする姿にありました。これは教育の環境がこのような対応のできる若者を育てていることを強く感じた次第です。前日のみならず、懇親会、大会当日のその仕事ぶりには、目を見張るものがあり、今時、この様に素朴で真面目に取り組む若者のいることに大きな感動を覚え、忘れられない大会であったことに感謝する次第です。

この折に大会会場の準備室としての演習室において懐かしい物を目にしました。それは、第14回大会が武蔵野美術大学において開催された際に、大会役員として尽力をされた朝山先生が後々の大会に用意をされた大会開催マニュアルをはじめ、ベルなどの必需品を収めたトランクに出会ったことです。例年、このトランクの行方が気になっていましたが、毎年、開催校に引き継がれていたことを知り、驚きと感動を得ました。まさに学会大会の象徴としての「絆」であり、次年度は、仙台市の東北学園大学を会場に開催される予定ですが、この「絆」のバトンタッチによる大会開催の成功を心より願っております。皆様方の更なるご協力をお願いいたします。

## □ 広報委員会

湯本長伯 委員長

1) 事務ホームページの更新を行った。皆様の情報提供を引き続きお願いします。最近少しずつ、支部・部会・研究会等についても掲載情報を戴き、アップデートの循環が出来かけていると思われま。事務HPのURLは、下記です。

<http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/>

2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています(現在41号)。メールアドレス登録者は175名で、過去のニュースはホームページからすべて見る事ができます。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/mail-news.html>

3) 会報は、昨年の大会後・4月号から、今回は大変遅れてしまい、まことに申し訳ありません。過去の会報も、ホームページから見る事ができます。ご活用下さい。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/47.pdf>

4) 広報委員会は、以下のメンバーで活動しております。

また広報委員は6名のみで、今もかなり手薄な状態ですので、皆様のご協力をお願い致します。

広報委員長：湯本長伯

[九州大学大学院・教授、九州支部長]

編集委員：片山勢津子

[京都女子大学・教授、近畿支部]

編集委員：渡辺秀俊

[文化女子大学・教授、関東支部]

編集委員：若井正一

[日本大学工学部・教授、東北支部]

編集委員：平井康之

[九州大学大学院・准教授、九州支部]

編集委員：平田圭子

[広島工業大学・准教授、中国支部]

今号の編集委員長は、平田委員です。HP・メールニュース編集委員長：湯本長伯[掲掲] 広報担当総務委員：白石光昭[千葉工業大学・准教授、関東支部]どうぞよろしく、お願い申し上げます。

5) 広報委員会へのご連絡は、下記までお送り下さい。

interior@design.kyushu-u.ac.jp または JASISeditor@yahoo.com

インテリア学会・事務ホームページ  
2008 copyright JASIS 日本インテリア学会(総務部) 登録日 2008年6月19日 [総務部連絡先] 第41号の号・  
http://www.design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/ 創立10周年を記念して

JASIS for INTERIOR SPACE  
京都府桂川町安室 実業社 協賛  
協賛校: 京都府桂川町安室 実業社 協賛  
発行日: 2008.06.19

論文報告集  
研究論文・報告書 (SITのリンクです)  
総務部: 湯本長伯 (担当: 編集) 7名  
※ 編集委員: 湯本長伯, 片山勢津子, 渡辺秀俊, 若井正一, 平井康之, 平田圭子  
※ 編集委員: 湯本長伯, 片山勢津子, 渡辺秀俊, 若井正一, 平井康之, 平田圭子  
※ 編集委員: 湯本長伯, 片山勢津子, 渡辺秀俊, 若井正一, 平井康之, 平田圭子

インテリア学会入会申込書  
懇談会  
FAX: 09-984-9400

日本インテリア学会支部 会費規程 大会規程一覧 学術口大会  
代表役員: 会長 副会長 監事 査読員  
運営委員: 総務 広報 編集 庶務  
研究部会: 建築 人間工学 デザイン 生産流通 教育 CAD 住宅  
支所: 北海道 東北 北陸 関東 東海 中国 九州  
総務部連絡先: 湯本長伯

## □ 国際委員会

加藤 力 委員長

今回はありません。

## □ 論文審査委員会

松本直司 委員長

本年度より、前委員長の直井英雄会長より論文審査委員会委員長を引き継がせていただきました、名古屋工業大学の松本でございます。なにぶん不慣れではございますが、心を引締めて一生懸命責務を果たしたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

ご承知のこととは存じますが、学会の最新の論文集において、すでに学会論文の送付先が私宛に変更されておりますが、この紙面をお借りして改めて変更した宛先を

記述させていただきます。お間違いのないよう、お願いいたします。

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

名古屋工業大学大学院ながれ領域

松本直司研究室気付

日本インテリア学会論文編集委員会 松本直司

応募に関しましては、それ以外には変更はございません。例年の論文集の最初に詳細が掲載されております。応募の時期等もありますので、再度ご確認くださいませと幸いです。なお、審査員の陣容も委員長以外は変更はございません。

論文集の発行は学会のたいへん重要な役割の一つでございます。研究活動をこれまでも増して活発化するためにも、皆様にはふるってご応募いただきますようお願い申し上げます。

## ■平成23年度支部だより

### □北海道支部

小林 謙 支部長（東海大学）

今回はありません。

### □東北支部

若井正一 支部長（日本大学）

東北支部におきましては、平成23年5月31日東北芸術工科大学にて、支部総会、第6回研究報告会を開催しました。

以下に報告会にて発表された8題のタイトルと発表者を掲載します。①階段昇降時の身体動作寸法とその特性に関する人間工学的検討 ～歩行者の足元と段鼻周囲に構成される機能寸法の計測～；太田 成美\*（日本大学大学院）、若井正一（日本大学工学部）②自転車の操作に必要な身体動作寸法に関する実験的検討 ～自転車の駐輪と走行に必要なスペースの計測～；岡田 遼\*（日本大学大学院研究生）、若井正一（日本大学工学部）③雪のギャラリー ～五城目朝市の新たな提案（設計）～；千田 龍成\*（日本大学大学院）④海彦・山彦のダイドコロ ～生産者と消費者が集う産直市場の提案（設計）～；松本 学\*（日本大学大学院）⑤なべころ坂のいえ ～坂道に建つ集合住宅と街並みの提案（設計）～；宮下 佳和\*（日本大学大学院）⑥音楽インタフェース研究 ～親しみやすい音楽とのつきあい方～；菊池 匠（東北芸術工科大学）⑦料理から食事にかけて取り巻くコミュニケーション空間の研究；佐藤 太一朗（東北

芸術工科大学）⑧作品発表 一椅座跨座一；松本 研一（秋田公立美術短期大学）

また、9月19日関東支部の研究会におきまして、東北支部の支部長である日本大学工学部建築学科教授 若井正一、同幹事である東北芸術工科大学名誉教授 日原もこの兩名が今回の震災の報告をそれぞれの立場から行いました。

日原氏はその後も引き続き現地調査を数回に渡り行い、山中にある住田町を訪れ、木造仮設住宅建設の目的と経緯等、予め建設担当者から様々な情報提供を得、町と学会との仲立ちを行って行きました。11月26、27日には、参加者12名で現地視察を行い、仮設住宅の様式や立地条件を確認し、居住からでた様々なニーズ、具体的な課題が浮かび上がったとのこと。それらの研究結果の発表が待たれます。

（支部事務局：東北芸術工科大学・早野由美恵記）

### □北陸支部

棒田邦夫 支部長（金沢学院大学）

12月3日（土）金沢ニューグランドホテルにて、北陸支部の忘年会をしました。この時期はカニ、たら、甘エビと海の幸がおいしい季節でもあり、鍋を囲んでの集いとなりました。金額以上の量と質に出席者からは「来てよかった！」「おいしい、おいしい」との声も聞かれ、また「寒いこの時期やっぱり鍋だね。」とみなさん大喜びで、楽しい時間を過ごしました。

また、おいしい肴と酒も手伝ってか、口の滑りもよくなり次年度への熱い思いもいろいろと聞くことができました。その思いの中には、「毎年の大会に参加できない会員も多く、そういう会員のために北陸支部で発表会を実施してほしい」との意見がありました。さらに発展的に、この発表会を学会の啓蒙も兼ねての事業とし、高校生、専門学校生、短大生、大学生にも声をかけ、学生たちの日頃の勉強の成果を発表する場としても考えてはどうかとの意見も聞かれました。

一方、教育についても「新たな [インテリア教科書] をつくってはどうか」との思いも聞かれました。確かに現在、インテリア教科書といわれる書籍の記載内容の資料は古く、今の新しい生活環境に合った教科書が必要であるように感じました。

次年度北陸支部では、このような意見を反映すべく年明け早々に集まり、具体的な指針を話合う予定です。先ずは6月末をメドに発表会の開催を目指します。

本年もよろしくお願いたします。

## □関東支部

山田智稔 支部長（相模女子大学）

3月の東日本大震災に対して、支部として何らかの活動を行うべきであるとの提案が年度当初からあり、東北支部関係者のご意見も伺いつつ検討し、①関東、東北支部の会員への被害状況聞き取りを中心とするアンケート調査、②東北支部の若井・日原両氏による状況報告と関西支部北浦氏の阪神・淡路大震災の際の事例報告を中心に「東日本大震災の現地調査報告と今後の課題」と題する研究会を行うこととした。

①は6月に成案を得て発送し、後述②に於いてその結果の概報がなされた。②は9月19日に関連3団体（（社）インテリア産業協会、インテリアコーディネーター協会、日本フリーランスインテリアコーディネーター協会）の後援を得て、関東支部主催で実施された。その中で、今後の課題として「……東北支部・関東支部協力の下に日本インテリア学会全体の活動と位置づけ、……実効性のある支援や研究をしていきたいと考えます。」とし、「1. 被災者支援と復興支援のため、私たちは現地の視察を行い、現地との連携の道を拓き、短期的・中長期的な支援活動、研究活動に結び付ける。……」に始まるアピールを提案し、参加者の賛成を得た。

そこで、③現地への視察を計画し、また④インテリア学会として震災被害の状況に取り組むことについて支部提案をもって学会理事会に計ることとした。

④は、10月23日インテリア学会大会（広島）での理事会に大震災に取り組む特別委員会の設置を提案（議題7）し、「踏査・ヒアリング、アンケートや生活空間の実地調査などを行い、『インテリアあるいは生活空間』の視点から考察し、問題点をまとめ、対策・提案などを提示し、実現に協力するものとし、あわせて適切な方法で公表する。また、今年度の部会長は関東支部長がつとめる。」などとする活動内容と共に「東日本大震災課題検討部会を設置する」こととして承認された。

それに従って③の実施は上記部会に移行されたが、宮城県南部地域（関上、荒浜ほか）と岩手県気仙地域ほか（住田町、陸前高田、大船渡、釜石平田、遠野市）の視察については、関東支部も協賛行事としてその実施に協力した。

なお、今期の支部幹事会は、震災関連に加えて支部ニュースの発行、見学会その他行事などを工夫し、次期に引き継ぐ組織と活動を考えることを今期の役割として発足している。そこで、幹事会の内にコアスタッフを置きチームで運営することとし、斉藤修幹事に副支部長（相当）としてそのリーダーの役割をお願いしたので、その旨を理事会にも報告した。

[追記] 東日本大震災課題検討部会への連絡は、下記にて受けています。関心のある会員諸氏の連絡をお待ちします。

事務局：文化学園大学造形学部建築・インテリア学科住居デザイン研究室気付

Email: tom-y@auone.jp

またはk-taniguchi@bunka.ac.jp

## □東海支部

建部謙治 支部長（愛知工業大学）

東海支部総会は、7月2日（土）に愛知工業大学自由ヶ丘キャンパスで開催された。まず、支部長選挙及び評議員選挙結果が報告され、支部長には建部が再選された（3期目、平成23年～25年）。審議事項の支部役員の指名では、副会長には河田克博と星田博子が、顧問には宇賀敏夫と藤田淑子が、監事として松本直司と大嶋浩が、また役職幹事として石黒嘉緒恵、北川啓介、清水隆宏、橋本雅好、原眞佐実の各氏が担当することとなった。引き続き平成22年度事業報告と決算報告、平成23年度事業計画案と予算案が審議され、原案通り承認された。総会終了後は、安藤清氏（A・N・D企画室、日本インテリアプランナー協会副会長）による「40年のイメージレンドリング・インテリアを振り返り」の講演が多くの出席者の中で行われた。さらに場所を変えた懇親会では講演者の安藤氏も参加し、おおいに盛り上がった。さて、平成22年度は支部開設20周年の節目に当たった。そこで記念事業として9月に中国上海・蘇州の庭園建築の視察旅行を、その後報告会を実施したが、年明けにはこれらを報告書としてまとめ記念誌として発行する予定である。また、2月には事業計画の一つとして、「留学生から見た母国と日本のインテリア」と題して、5人程度の各国留学生の参加によるシンポジウムと交流会が企画されているので、これも機会があれば報告したい。特筆すべきことはインテリア6団体による連絡会のリレーセミナー（講演会）が年1～2回のペースで開催され、今回で9回目を数えるに至っている。昨年10月に実施した第9回リレーセミナーは藤江和子氏（藤江和子アトリエ代表取締役）による「インタラクティブなシーナー・家具・建築・環境」の講演が東邦ガス栄ガスビルで開催され、100名以上の多くのインテリア関係者の参加で盛況であった。

## □関西支部

小宮容一 支部長（芦屋大学）

4月に支部選挙を実施し、23日開票で、17名の評議員を選出しました。この評議員から更に支部長・副支部長



角屋 1階広間にて



KRP 9号館エントランスホールにて

選挙を実施、5月24日に開票し、私小宮が支部長、副支部長に片山勢津子先生とペリー史子先生が内定しました。これを受けて6月25日に評議委員会・総会を開催し、承認を得ました。この評議委員会に支部規約改訂案の提示があり、会議で議論の上、第3条支部役員の副支部長の数と選出法を改訂しました。「評議委員会」の条項を置く件は先送りとなりました。改訂は総会で可決されました。改訂規約、又、平成23/24/25年度の組織は関西のHPをご覧ください。この後、ご承知の様に本部の理事選挙となり、平成23年度上半期は選挙に終始した感があります。10月の広島大会には関西から、15題の発表がありました。参加者は20名かと思います。私見ですが、尾道の見学会は急な石畳の坂道とその狭い道幅にヒューマンスケールを感じました。又、懇親会の牡蠣はさすが広島で、美味なるものでした。12月10日に京都に見学会を開催しました。1カ所は島原の揚屋「角屋」で、2階の「扇の間」「檜垣の間」「青貝の間」に江戸時代後期、京の揚屋の華やかさに触れることができました。もう1カ所は旧大阪ガス京都工場敷地の街区再開発「KRP」とその中の新築レンタルオフィス9号館（日建設計）で、コの字型ヴォイド型、中庭吹き抜け昇り庭に現代的息吹を感じました。江戸期と平成を一気に行き来しましたが、共通点は、庭と庭を通る風でしょう。参加者は16名。12月のこの時期、JR京都駅近くの「蔵倉」で忘年会・

懇親会となりました。

来年3月には、大阪淀屋橋界限「淀屋橋WEST」の企画者・仕掛人の澤田充氏の講演会を企画中です。コンセプトは「都市空間をインテリアと見る」（仮称）です。

#### □中国・四国支部

大森豊裕 支部長（近畿大学）

第23回インテリア学会大会の概要報告をご覧ください。

#### □九州支部

湯本長伯 支部長（九州大学）

2011年度は、『市民建築文化展』を展開し、湯本が会長をしている福岡インテリアコーディネーター協会、および九州地域協会と連携して、インテリア・建築・都市の文化的側面について、多くの一般市民向けに出前講演とワークショップを行った。小学校や小中高大一貫校などに協力戴いた。まだまだ年度末まで継続中である。また九州IC協会協議会主催の『インテリアフェスタ』や、インテリア産業協会主催の『トータルインテリアキャンペーンTIC』にも協力し、インテリア文化のエンドユーザー教育には力を入れている。インテリア系の異業種交流会や講演会には、延べ300名近い参加があった。なかなか単独の活動を展開できないので、次年度も他のインテリア関係団体と十分連携して活動したい。



### ■研究部会だより

#### □歴史部会

幹事：河田克博（名古屋工大）

〈見学会〉今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2011年10月22日（土）（13：00～16：00頃）に広島県尾道市にて開催しました。見学場所は、北村洋品店、三軒家アパートメント、尾道ガウディハウス、光明寺会館、帆雨亭などです。坂のある道沿いの空き家などを、さまざまなインテリアの工夫で再生しようという地元の人々の意気込みが伝わってくる有意義な内容でした。あいにくの雨空にもかかわらず参加者は約50名。遠方からの参加者も多数あり、新鮮な知見を得て盛況裡に進行した見学会でした。詳細は、大会見学会の記事をごらんください。

〈幹事会〉大会に合わせて、10月23日（日）の昼食時に開催し、今後の事業計画などについて協議しました。とくに、次年度の東北での大会時の見学会について、実

行委員会への協力を図ることを確認しました。

## □計画・デザイン部会

栗山正也 部会長 (KDアトリエ)

JASIS NEWS No.44 ('09.2.25) で報告した・インテリア環境評価研究会は当部会が提唱した“生活と密接に関わるインテリア空間は建築の環境評価 (CASBEE) とは別種の評価が必要”との主旨から、インテリア関連団体の協力を得て活動を続けてきましたが、より具体の段階へ進めるためインテリアの職能団体8団体が結束して活動する組織「インテリア環境 (評価) 協議会」設立を目指す発起人会を本年9月に発足させました。以下にその経緯と今後の活動予定の概要を報告いたします。

### ■「インテリア環境評価研究会」(代表・加藤力) 報告会開催……………10.9.16

- ・インテリア関連11団体の代表者 (又はその代理者) の参加 (当学会は高橋会長が参加) があり、研究会の報告と意見交換がされた。
- ・報告内容: 「環境問題に関する社会の動向」「インテリア環境の特殊性とその評価の考え方」等
- ・意見交換: 「“インテリア環境情報”を共有し生活者を支援・啓蒙し、社会貢献すると共に専門家としての立場を確立する」ことの意義と、そのために関連団体が結束する必要を確認し、その活動組織として協議会設立を目指し「研究会」を「設立準備会」に改め、準備を進めることが合意された。

### ■「インテリア環境 (評価) 協議会」設立発起人会発足……………2011.7.25

- ・設立準備会で協議会の組織、活動内容等を検討し、インテリア職能団体8代表者の承認を得て、標記発起人会 (代表・インテリア学会会長) を発足。
- ・今後は設立準備会において
  - 1) インテリアに関連する環境情報等の収集・整理 (※1)
  - 2) インテリア環境評価の仕組みの検討等 をすすめる。
- ・発起人会はその成果を見定め、適切な時期に協議会設立を目指す。

※1 「日本インテリア学会・第23回大会」研究発表 [インテリア環境評価・その1] 参照

## □人間工学部会

白石光昭 部会長 (千葉工業大学)

人間工学部会では、3月に住宅とユニバーサルデザイ

ンに関する研究会を企画しております。

詳細な日時が決まりましたら、お知らせいたしますので、ご参加ください。ところで、本部会は最近活発な活動ができておりません。このため、できるだけ多くの方に幹事としてご参加いただき、活発な活動を継続したいと考えております。是非、ご参加ください。ご連絡をお待ちしております。また、研究会やイベント等に関して、どのような内容でも結構ですので、会員の皆様からのご希望をお寄せください。

## □教育部会

河村容治 部会長 (東京都市大学)

### 第18回卒業作品展および巡回展の開催

2011年10月23日 (日) 近畿大学工学部 メディアセンターにて、大会本部との共同で第18回卒業作品展を開催しました。全国の大学・短大・専門学校・高校28校から35作品の応募がありました。同日、開かれた審査委員会で優秀作品を選出しました。詳細は、川島平七郎審査委員の報告を参照ください。

大会に引続き本年も立川ブラインド工業 (株) の協賛で、タチカワ銀座スペースAtteにて、11月2日 (水) ~ 5日 (土) に巡回展を開催し、好評を博し多数の来場者がありました。初日夕刻にはオープニングパーティが開かれ、植松暉子審査員より作品の講評がありました。受賞した山岡優さんの自作についての説明もあり、参加した学生は、受賞者の生の声が聞け、有意義な時間を過ごすことができました。今回は巡回展運営に受賞者の方々に協力いただきましたが、今後は出展校の協力を期待しています。

2012年度も第19回卒業作品展の開催を計画しています。新たに参加を検討されている方は河村まで連絡ください (kawayoji@tcu.ac.jp)。



(巡回展会場にて、受賞した方々: 左から吉永有美子さん (昭和女子大学)・伊藤千尋さん (文化学園大学)・中岡優さん (東京家政学院大学)

## ●卒業作品展 インテリア学会賞選考の報告

川島平七郎 幹事 (元東横学園短期大学)

平成23年度の標記インテリア学会賞の選考については、河村教育部会長および当日の審査員全員の確認をもって、以下のとおり報告する。

1. 日時：平成23年10月23日(日) 11時～12時
2. 場所：近畿大学工学部B館ラウンジ
3. 審査員：直井英雄学会長、森保洋之大会委員長、大森豊裕実行委員長、植松暉子教育部会幹事、北浦かほる教育部会幹事、川島平七郎教育部会幹事(教育部会審査員は、委員長+幹事1名であるが、当日の合意により幹事3名とした)
4. 経過：10時～11時 下見 11時～12時 審査合議  
互選により川島が司会を務めることとなり、審査の在り方について、①インテリアとしての独自性が重要(とりわけ建築に対して)、②空間系とエレメント系が両方選ばれるべきだろう、等が話し合われた。具体的には、35作品から、最優秀賞1、優秀賞3、および奨励賞を選ぶため、まず6名が各3作品を(順位なしに)推薦することとした。その結果、4票 昭和女子大学 吉永 有美子「送り先、その先…… 核廃棄物最終処分地見学施設」、3票 東京家政学院大学 中岡 優「1/3解放小学校」神戸芸術工科大学 山神 達彦「Melancholic Rooms」文化学園大学 伊藤 千尋「ギュッ だっこ椅子」、2票 広島大学 山下 絵梨佳環境造形学園 石川 隆一、1票 近畿大学 津田 英明 以上を参考に、全員で候補作品を再度見て批評し、改めて合議した結果として、4票を得た作品が最優秀賞、3票を獲得した3作品が優秀賞と決定した。最優秀賞は、インテリア作品としては極めて特異なテーマではあるが、核廃棄物処分場ではなく「処分地見学施設」である点に人の直接的な感性により核問題をインテリアとしてとらえようという姿勢が感じられること、また、卒業作品としては福島第一原発事故よりも前に計画されたであろう先見性、廃墟を思わせる地上の入り口と蟻の巣のような地下空間の迷路の表現性などを高く評価した。優秀作品では、中岡優の「1/3解放小学校」では、2階に設置された大きくうねる有孔壁面が生む流動的なインテリア空間の楽しさ、山神達彦の「Melancholic Rooms」では、インテリアと町とが接する開口部やファサードの光と影の巧みな扱いが印象的であり、伊藤千尋の「ギュッ だっこ椅子」では、親子が2人で座る椅子周りの要素空間の多様なイメージとシーソーになったり裏返すと山登りもできる自在なエレメントの提案は評価が高かった。審査前の総論の中で、インテリア作品は、空間系とエレメント系の両方を選びたいとの方向性が話されていたが、この条件も満たしており、男女学生が入っていることも結果論であ

るが望ましいと考えられた。なお、奨励賞は、今回、高等学校から1作品のみの出品だったので、自動的に決まるのか、という議論はあったが、内容を確認し、評価に値する作品であると認められた。また、従来は受賞作品の結果のみが発表されてきたが、審査経過の内容は大会報告の会報の中に示して、その評価内容を公表すべきであろう、と決めた。16時閉会式において、以上の概要を川島より報告した。

5. 審査経過の公表この審査経過は、上記の大会報告として公表するには、十分吟味することが必要であるため、当日の審査員6人、および、当日不在であった教育部会長の目で吟味の上、最終決定したものである。送付先：直井英雄、森保洋之、大森豊裕、植松暉子、北浦かほる河村容治教育部会長以上6名の訂正、修正を反映したものである。

## □CAD部会

川島平七郎 部会長 (元東横学園短期大学)

今回はありません。

## □大系特別委員会

湯本長伯 委員長 (九州大学)

事業が遅れておりますが、多くの学会メンバーが参加した出版も一段落しましたので、下記のような日程で、準備会を開催致します。

日 時：2012年3月3日(土)・16時～

場 所：九州大学有楽町・606会議室

## ■平成22年度臨時理事会議事録

松崎 元 (千葉工業大学)

日 時：平成23年8月6日(土) 13:00～15:30

会 場：千葉工業大学(津田沼)

出席者：

<理事>高橋、加藤、直井、上野、栗山、白石、建部、湯本

<選挙管理委員会>八田、松崎(記録)

配布資料：

- 1) 日本インテリア学会平成23/24/25年度役員選挙の経緯報告(資料1)
- 2) H23年度臨時理事会検討事項(資料2)
- 3) 日本インテリア学会(平成23/24/25年度)理事選挙

投票結果（資料3）（※理事会終了後に回収）

上野総務委員長より、選挙結果の承認と会長・副会長選出手続きのため臨時理事会の開催に至った経緯の説明があり、資料の確認と選挙管理委員紹介の後、議事に移った。

議 事：

1. 評議員および理事選挙の結果報告（資料1）

選挙管理委員会の八田委員長が、資料1に基づき選挙の流れについて以下の通り報告した。

- (1) 各支部による評議員選挙の依頼・報告
- (2) 評議員選挙結果を現理事により確認
- (3) 新評議員による理事選出・監事推薦候補者の承認
- (4) 理事選挙の開票・監事承認の結果集計
- (5) 理事選挙・監事承認の報告

2. 新理事・監事の承認について（資料2, 資料3）

- ・理事数25名に対し、出席8名、委任状13通により、理事会の成立を確認した（会則第17条：1/2以上の出席により成立）。
- ・新評議員95名により理事選挙を郵送による投票で行なった結果、有効投票数66票（白票3票）、無効投票数3票（期限後の消印）であった。得票数の内訳は配布資料3の通りである。
- ・理事選出者数16名に対し、得票数20以上の15名と19票の同数者3名の18名に加え、18票以下の支部長4名を合わせて合計22名を選出した。
- ・事前に関東支部と九州支部から支部長交代の報告があったが、内規により支部長は理事・評議員となるため、関東支部長の得票数は18票以下であるが、4名の中に含める。九州支部長は20票以上の得票であるため、理事に選出されている。
- ・監事2名については、いずれも信任多数で承認された。

3. 会長および副会長の選出について

- ・8月26日（金）に開催される総会前の新理事における理事会において、本日承認された新理事により、立候補または推薦による会長の選挙を行い、平成23/24/25年度の会長を決定する。同様に、副会長2名についても選挙により選出する。

4. 会長推薦枠の理事について

- ・8月26日の新理事による理事会において、平成23/24/25年度の会長を決定した後、必要に応じて会長推薦による理事を追加する。

5. 今後のスケジュールについて

- ・8月26日（金）13時開催の理事会（旧）では、まず平成22年度決算並びに平成23年度予算案の承認を受ける。その後、旧理事によって承認された新理事（平成23/24/25年度）を招集し、会長、副会長を選出の上、会長推薦枠理事を決定する。同日15時からの総会においては、平成22年度決算並びに平成23年度予算案の承認と平成23/24/25年度役員の承認を受ける。

6. その他

- ・今後は住宅以外に、公共建築のインテリアに関する研究も重要になる。会員の自宅を訪問するなど実体験を得られる活動を進めてはどうか。（高橋会長）
- ・関東支部を中心に、被災地、避難所に関するセミナーを行なうが、アメリカの避難所におけるベッドの事例や日本での万年床による領域確保などが興味深い。

## ■ H23年度第1回理事・評議員会議事録

松崎 元（千葉工業大学）

日 時：平成23年8月26日（金）13:00～13:35

会 場：千葉工業大学

出席者：＜理事H22年度＞高橋（鷹）、加藤、直井、上野、大森、栗山、小宮、白石（光）、日原、松本（直）、湯本、若井、渡辺（秀）  
＜評議員H22年度＞棒田、河田、小原（誠）

配布資料：

- 1) 平成23年度日本インテリア学会総会スケジュール
- 2) 平成23年度日本インテリア学会総会資料
- 3) 平成20-22年度理事・評議員／平成23-25年度理事・評議員（案）
- 4) 日本インテリア学会入退会者名簿（8月17日）

議 事：

1. 開会宣言（上野）

2. 定足数の確認＜理事H22年度＞

- ・評議員93名（うち理事24名）で、委任状30名（理事6名）、出席者数16名（理事13名）であり、理事・評議員会の成立に必要な定足数を満たしていることが確認された。

3. 会長挨拶（高橋鷹志会長）

4. 配布資料の確認（上野）

5. 第1号議案：平成22年度 事業報告および決算報告（案）の件（上野）

・上野総務委員長より、平成22年度の事業報告および決算報告（案）の説明があり、〈支出の部〉支出計〔差額〕の空欄に、784,749を追記した上で、資料1（P1）の通り異議なく承認した。

6. 第2号議案：平成23年度 事業計画（案）および予算（案）の件（上野）

・平成23年度組織（案）（P3）について、部会再編の結果を確認し、〈支出の部〉調査研究費〔備考〕の8部会を6部会に修正した。

・上野総務委員長より、平成23年度の事業計画（案）および予算（案）の説明があり、入退会者名簿（資料4）より会費収入を確認した上で、資料1（P2）の通り異議なく承認した。

7. その他

・資料2（P3）について、特別部会のあり方は、別途、年度ごとに取り扱う（栗山）。

・松本（直）理事から、予算（案）の繰越金収入に対して支出の次年度繰越金が150万円ほど少ない点について質問があり、論文集の印刷代が2回分含まれているため、次年度以降に問題がない旨、上野総務委員長から説明があった。

・小原（誠）評議員から、賛助会員企業が減っているが、残っている企業名を確認したいとの要望があった。あらためて最新の名簿を確認する。

・組織（案）に関連して、小宮理事からAIDIA実行委員会の現状に関する質問があった。加藤理事より、中国を中心に活動が進み2カ国が加わったが、日本と韓国が苦慮しているとの回答があった。

## ■ H23年度第1回理事・評議員会議事録

松崎 元（千葉工業大学）

日 時：平成23年8月26日（金）13:45～14:40

会 場：千葉工業大学

出席者：〈理事H23年度〉高橋（鷹）、加藤、直井、上野、大森、小宮、白石（光）、日原、棒田、松本（直）、湯本、若井、渡辺（秀）

配布資料：

1）日本インテリア学会（平成23/24/25年度）理事・評議員（案）

議 事：

1. 定足数の確認〈理事H23年度〉

・平成23年度理事22名のうち、出席者数13名、委任状6名で、理事会の成立に必要な定足数を満たしている。（理事の1/2）

2. 平成23-25年度 理事選挙の結果報告

・8月6日に開催された臨時理事会（千葉工業大学）において、各支部から選出された平成23-25年度評議員の中から、郵送による互選で22名の理事が選出された。

・今回の役員選挙の遅れが、新年度の活動に大きく影響しているが、これは一支部の評議員選挙の遅れに原因している。

3. 平成23-25年度 会長選挙

・立候補者が1名であったため、選挙は行わず、候補者演説の後、拍手により満場一致で平成23-25年度の会長は、直井英雄氏（東京理科大学 理事）に決定した。

4. 平成23-25年度 副会長選挙

・直井会長から推薦のあった2名について、無記名投票の結果、過半数を超え、加藤理事、西出理事が平成23-25年度の副会長に承認された。

・次に、立候補した湯本理事について、無記名投票を行なった結果、過半数に至らなかったため、不信任となった。

・この他、日原理事より女性の副会長を推薦する意見が出されたが、本人不在により了承が得られないため、審議は打ち切りとなった。

5. 会長推薦による理事の追加

・総務担当の意見を参考に、会長推薦によって、研究協議会の栗山評議員、教育部会の河村評議員、業界企業より松本（吉）評議員、東北支部から関東支部へ移った鈴木（敏）正会員ら4名の理事追加が承認された。

6. 平成23-25年度監事の承認

・理事選挙と同時に郵送による信任投票が行われ、平成23-25年度監事として、佐藤公信、上野弘義両正会員が再任された。

7. 部会等について

・デザイン部会、計画・構法部会、住宅部会を統合し「計画・デザイン部会（仮称）」とする。

・論文審査委員長が直井会長から松本（直）理事に交代した。

8. 事務局の移転について

・現事務局との引き継ぎを踏まえ、事務局業務を徐々に千葉工業大学へ移行する。

9. その他

・名誉会長として高橋鷹志前会長、名誉会員として西出和彦副会長が推薦され、拍手をもって承認された。称号の授与は、これまでの授与者を含め、本年度大会に

て行う予定である。

## ■ H23年度総会議事録

松崎 元 (千葉工業大学)

日 時：平成23年8月26日 (金) 15:00～15:45

会 場：千葉工業大学

配布資料：

- 1) 平成23年度日本インテリア学会総会スケジュール
- 2) 平成23年度日本インテリア学会総会資料
- 3) 平成20-22年度理事・評議員／平成23-25年度理事・評議員 (案)
- 4) 日本インテリア学会入退会者名簿 (8月17日)
- 5) 第18回卒業作品展・巡回展
- 6) 社会革新と産学連携による科研費獲得推進に関する記事：日刊工業新聞 (2011年8月17日)
- 7) 「東日本大震災の現地調査報告と今後の課題」に関する研究会のご案内 (関東支部)

議 事：

1. 開会宣言 (白石総務委員)
2. 定足数の確認 (白石)
  - ・正会員数438名のうち、委任状153名、出席者数26名で、総会成立に必要な定足数 (正会員438名の1/4以上110名) を満たしていることが確認された。(会則15条)
3. 議長団の選出 (白石)
  - ・議長：若井、書記：松崎、議事録署名人：棒田、大森が選出された。
4. 第1号議案：平成22年度 事業報告および決算報告 (案) の件 (上野)
  - ・上野総務委員長より、平成22年度の事業報告および決算報告 (案) の説明がなされた。
  - ・松崎総務委員が監事からの監査報告書を代読し、平成22年度の決算報告 (案) について、資料の通り異議なく承認された。
5. 第2号議案：平成23年度 事業計画 (案) および予算 (案) の件 (上野)
  - ・上野総務委員長より、平成23年度の事業計画 (案) および予算 (案) の説明があり、資料の通り挙手多数によって承認された。
6. 第3号議案：平成23-25年度役員選出の件
  - ・各支部から選出された平成23-25年度評議員95名が承

認された。

- ・その中から郵送による互選により選出された22名の理事が承認された。(20票以上15名、19票同数3名、18票以下の支部長4名)
- ・平成23-25年度の新会長として、理事会で決定した直井英雄氏 (東京理科大学 理事) が承認された。
- ・直井会長から推薦のあった2名について、投票の結果、加藤氏、西出氏が平成23-25年度の副会長として承認された。
- ・総務担当の意見を参考に、会長推薦によって、研究協議会の栗山評議員、教育部会の河村評議員、業界企業より松本 (吉) 評議員、東北支部から関東支部へ移った鈴木 (敏) 正会員ら4名の理事追加が承認された。
- ・監事に佐藤公信、上野弘義両正会員が承認された。

### 7. 部会の統廃合について

- ・デザイン部会、計画・構法部会、住宅部会を統合し「計画・デザイン部会 (仮称)」とする。

### 8. その他

- ・現事務局との引き継ぎを踏まえ、事務局業務を徐々に千葉工業大学へ移行する。
- ・次年度の大会は、北海道または東北での開催を調整中で、若井支部長より検討状況の説明がなされた。
- ・社会革新と産学連携による科研費獲得推進に関する記事 (資料6：日刊工業新聞) が紹介された。(湯本)
- ・議事終了後、直井新会長、今年度大会実行委員長の大森支部長、関東支部の斉藤評議員より研究会のご案内 (資料7)、会場の千葉工業大学上原教授より挨拶があった。

## ■ H23年度第2回理事会議事録

松崎 元 (千葉工業大学)

日 時：平成23年10月23日 (日) 12:10～13:00

会 場：近畿大学工学部 (広島)

出席者：直井、加藤、西出、高橋 (鷹) 上野、大森、片山、川島、北浦、栗山、小宮、白石 (光)、鈴木 (敏)、建部、日原、棒田、松本 (直)、松本 (吉)、山田、若井 (20名/26)

配布資料：

- 1) 平成23年度日本インテリア学会 第2回理事会議事次第
- 2) 平成23-25年度理事・評議員・監事 名簿  
平成23年度第1回理事・評議員会 議事録  
平成23年度第1回理事会 議事録  
平成23年度日本インテリア学会総会 議事録

### 3) 特別部会の設置について (関東支部)

議 事 :

#### 1. 配布資料の確認 (上野)

#### 2. 特別部会の設置について (山田)

- ・関東支部の山田支部長より、資料3に基づいて東日本大震災に対する関東支部の取り組みについて説明があった。
- ・これまで支部を中心に研究会を開催してきたが、今後は研究協議会の特別部会として、学会内外との連携も含めて、活動を継続したい。期間は概ね3年、最大5年とする。
- ・阪神大震災の時には、10万円の活動費用を出した前例がある (加藤)。
- ・来年度以降を考えると10万円では足りないため、費用に関して継続した議論が必要 (松本 (直))。
- ・活動費の補助は、学会内予算では対応できないため、余剰金をもつ研究部会、支部の寄付を総務として呼びかけたい (上野)。
- ・以上をもとに特別部会の設置が承認された。なお、活動費の金額と配分方法については、直井会長、栗山研究協議会代表、上野総務委員長に一任する。
- ・なお、既活動の一つである岩手県住田町ほかの現地視察については、若干の空きがあるため、更に予約を受け付けている。

#### 3. インテリア環境評価協議会に関する件

- ・インテリア関連5-8団体と栗山理事を中心に、室内環境の評価に関する協議会の発足を進めて来たが、日本インテリア学会として正式に参加を検討願いたい (加藤)。
- ・建築環境評価のCASBEEに対し、インテリアの関連団体でまとまった評価システムとして、世の中へ発信したい (栗山)。
- ・協議会事務局は、引き続き日本商環境設計家協会内に置く方向で進めている。
- ・学会の社会貢献として重要なテーマであるが、当学会の力、人材、財源を考え、現実的に対応可能な範囲から対応してもらいたい (直井)。
- ・学会としてインテリア環境評価協議会へ参加することが承認された。今後の経過は、随時事務局へ報告する。

#### 4. 第24回大会について (若井)

- ・来年度の第24回研究発表大会は、東北支部を中心に仙台の東北文化学園大学で開催することが了承された。

#### 5. その他

- ・直井会長より挨拶、大森大会実行委員長より午後の講

演と発表について説明があり、閉会した。

## ■事務局より

\*\*\*事務局移転のお知らせ\*\*\*

平成24年4月1日より、事務局が下記に移転いたしますので、お知らせいたします。なお、詳細 (電話番号等) は後日お知らせいたします。

<新事務局>

〒275-0016 習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学工学部デザイン科学科上野研究室気付

## ■連載『インテリアの行方』

～インテリアの行方 (これから) ～

灰山彰好 (studioHAIYAMA)

これからの、これからの一と模索し続けて幾十年、ついにこれからの無い年齢に到達した。キャリアを終えるに当たって、広島大会で標榜した「都市のインテリア」との、やや言語的に混乱したテーマに若干の説明 (言い訳か) を加えさせていただいて、最後の「これからの一」としたい。

多くの大学会員と同様、私のキャリアの前半は工学部建築学科でのもの、15年前に生活科学系の大学に移ったのを機会に本学会に入会した。建築士課程が生活科学部に置かれるようになった理由は、新築が減りリサイクルが増えるとの国策的展望に沿うものと説明されていたから、「これからの建築学はインテリアである」とするブームに乗った「進出」であったことは事実。しかし私の場合はただ時流に乗ったわけではなかった。学位論文の執筆を通して建築空間の内側ー生活、環境、人間、行動、意味、内包ーの探索に興味に移り、研究方法にも具体的な手がかりを得ていたからである。だから生活科学部からお誘いがあったとき、内側をインテリアと読み替えるだけでよかった。前会長高橋鷹志先生のお名前も、環境ー行動系を標榜する先達として存じ上げていた。

しかし、私が生活科学部に入ってまず始めたのはインテリア資格教育ではなく建築士課程の設立であり、住に比重を置く建築学教育の実践であった。もちろん、インテリア=室内設計とする業界が厳然として存在することは百も承知していた。近代的なビルの地下に正統派の和風割烹があったりするのはフィクションとしてとても面

白いし、タイタニック号など豪華客船の内装がインテリア業のルーツであるとお話も伺っていた。しかしインテリア＝室内学では、大学教育がもたないのである。その理由を筆者は何度も大会で発表してきたので、梗概をお目通ししていただくとして、最近遭遇したエピソードを紹介して説明に代えたい。インテリアに比重を置くある大学の卒業設計展に招かれた折、ある研究室の先生と学生から住宅地再開発案の説明を受けた。カリカリの建築士教育をなさる先生であるから室内設計に終わらないビッグプロジェクトであったが、ついいつもの癖で「君のへやはどこ」とカマをかけてみたところ、彼は迷わず子供室を指さした。「そうか君は子供だったのか」と言ってしまったから先生の方が赤面。とても教育熱心な先生を悪く言うつもりはまったくないが、学生が大人になっていなかったことは確か。恐らくその大学の製図室が想定する社会とは、クライアントどまりだったのではないかと思う。建築学教育の良いところは、国家試験に牛耳られているせいで公民化教育が義務化されており、学生は良くも悪くも大人になることを促される。

大衆化された今時の大学生に、「坂の上の雲」の主人公のように天下国家を熱く論じるとは言いにくい。しかしだからといって「私のへや」を設計課題とするのは余りに迎合的に過ぎないか。時代を背負う若者を育てる製図室では、公共空間以外に設計課題はあり得ない。では建築学科の設計課題とどう違えるか。

そこで「都市のインテリア」である。公共空間の内側 interior を設計課題に、研究課題にしたらよいのではないか。都市計画図を1/50で描く境地である。具体的なヒントとして、筆者は最近、アレクザンダーのパターン・ランゲージを引用した。彼が万言を費やして主張するのは、いい意味での公私混同である。公（オオヤケ）の道路、交差点を交通制限して私（ワタクシ）が生きるミチやヒロバにする方法の開陳が骨子であり、今や私の近所でも実現されている。が、アレクザンダーの場合は更にワタクシをオオヤケ化にする方法についてもページを割いているところに先見の明がある。当時は素人の妄言とする世論もあったと聞くが、尾道の空き家再生グループの活動を見ると、信じてみようという気になる。ワタクシをオオヤケ化できる仕事—これこそ自己実現、男子の（女子の）本懐ではないか。耳栓（iphon）を捨て街に出よう、というのが、私の最後のこれからの一である。

～岩手から考えること—仮設住宅インテリア試論として～

山田智稔（相模女子大学）

関東支部が計画し「東日本大震災課題検討部会」が

引き継いで実施した震災被害地の視察において、仮設住宅のあり方に注目して観察したこと、考えたことを記してみたい。もっとも、仮設住宅は岩手県内だけで13,984戸・317団地（岩手県ホームページ）に及び、その中から住田町（3団地93戸）・陸前高田市（1団地60戸）・大船渡市（1団地134戸）・釜石市（2団地282戸）・遠野市（1団地40戸）について、それも主に木造仮設を見たのであるから、あくまでエッセイとしての報告である。

\*

釜石市平田（へいた）の総合運動場を埋めた仮設住宅団地の非木造住棟のゾーンを高所から見下ろすと、何列も平行に並ぶ金属板のブルーの屋根が間隔を詰めて並ぶ様子は、それが連続する住居であるとは到底思えない。しかし、斜面を下って住棟の間を歩いてみると、住戸の入口回りには風除け・階段・手摺などが個別に工夫され、花が育てられ、時にベンチや自転車が置かれて、そこが暮らしの場であることを示している、いわば人の気配が感じられることにホッと一息つけたのである。

○仮設住宅といっても、様々である。

仮設住宅は、仮設という条件の中で「日常の生活のためのミニマムを保障する住居であり、標準的と考えられる機能を備えている」ことを目的とする点では同じであるが、同じ木造仮設であっても「人力のみで建て上げる（住田町）」ことによって建設費を下げるものもあれば、「仮設の後に部材の再利用を意図する（遠野市）」ことによって長期的なローコストを計るものもある。このような設定条件の違いは当然のことながら、形態や性能、その実現性に影響を与えるものである。

仮設住宅の設計条件を理解して観察することは重要である。

○しかし、共通する課題はある（のだ）。

今回は、仮設住宅の内部を十分に見ることはできなかったが、偶々の空き家（住田町、写真1）・展示場での住田町モデル住宅（有楽町国際フォーラム）などを見学し、また関係者の話を考え合わせて、課題を典型的に考えてみる。

一つは、収納である。現代の我が国における便利な生活は多くのモノによって支えられている。仮設で暮らすヒト（家族あるいは小集団）とそこで使用されるモノとの関係が整理されていないので、収納についてはプランニングの条件化されていない、つまり、住居内のモノの秩序は入居者に任されている結果、モノが床に溢れることになる。仮に、人が使える床面積を「床有効率」とでも定義すると、かなり低い数値になっている（であろう）。

収納を計画することが必要である。ただし、仮設に作り付けではなく「仮設住宅用収納キッド」のような形で受け入れ、それを展開することになるのか。

二つは、設備機器とそのための空間（台所・浴室・便

所)の位置づけと床面積である。今更、共同施設というわけにはいかないと、極力コンパクト化が追求されることが必要である。また、冷凍冷蔵庫など標準設備とすべき機器の確認も重要であろう。

暮らしとインテリアの観点からの観察(それこそ「住まい方調査」)に戻って、考えてみたい。

○内外の連続 —生活あるいは行為は「ウチ・ソト」にわたる

日本の住居の特徴の一つに、室内から屋外への連続性を挙げることは常識であろう。現代の住居でも、掃き出しのテラス戸が多く用いられる所以である。しかし、今回は釜石市平田の団地の一面でテラス戸を見かけただけである。(写真2参照)その原因にはローコスト化とか、構造強度とか、防犯性などが挙げられるようである。狭小な居室に対して、縁側、テラス、バルコニーなどの果たす役割を検討したいものである。

また、今回見たものでは、窓が小さく高いものが少なくなかったのは改良すべき問題点である。住居を高密度に配置することになる点も配慮しつつ、窓の大きさと位置は十分考えておきたい。

○生活が外に出る。—モノが仮設住宅の回りに増える

仮設住宅団地を歩いてみると、時が経つほどにモノが住宅の回りに置かれるようである。

玄関の外には、透明なプラスチックを袖壁状に張った風除けを設えるのが標準的である。ここを手がかりに様々な使い方がなされるようである。その風除けの内側に収納棚が作られるのは玄関の収納の外部化であり、ベンチに白菜が干されるのは縁側の代用であろうか。例えば、①モノを干す(洗濯物、野菜、干し柿、魚など)、飾る・鑑賞する(鉢、鉢置き棚など)、②コミュニケーション(ベンチ、椅子と机など)、③収納(棚、下足箱など)、④放置(自転車、交換用タイヤなど)と大別できよう。(写真3、4参照)

生活の外部化であり、また空間の生活化あるいは自己

表現でもある。何をしてもよいわけではないが、しかし、総てを禁止するわけにはいかないであろう。居住者にまかせること(モノ)、ルールをつくること、仮設住宅の計画が最初から配慮すべきこと(モノ)、団地計画の中で準備することなどに類別し、団地全体で考えるべき問題であろう。



釜石市平田第5の一般ゾーン  
「玄関脇はテラス戸タイプ開口と物干し」



住田町住宅外観(北より)  
「花、干し柿、ベンチ、自転車…、設備機器」



住田町仮設住宅内部  
入口よりDKから2居室、浴室、便所の入り方を見る



釜石市平田第5のケアゾーン  
「玄関対面型配置、デッキと屋根を持つコリドール」  
セメインテリア化されると、置かれるモノも異なる。

○住戸配置の工夫 一団地計画の「インテリア性」について

事例から学ぶとすると、戸建て仮設で2住戸の間に透明な波板で屋根を掛け物置としたもの(住田町)、2つの住棟の玄関を向き合わせたもの(釜石市平田)、さらにその間に木造デッキと透明な屋根を掛けたもの(同平田)など、仮設住宅を単位として工夫する可能性を示している。つまり、仮設内部のインテリアに加えて、仮設住宅相互間のインテリア(インテリア性)の観点がある。

さらに言えば、不規則な土地に立つ小規模な仮設団地(住田町の2例)では、単純な平行配置ができない(建設課長談)ために、小広場ができたり、雁行配置となったりした結果、「インテリア性」とでも言う点で効果を上げていることも無視できない。さらに外部家具(ストリートファニーチェアや植栽がより細かく効果を挙げるであろう。

これらの延長上に、仮設団地の広場の計画があると言えるのではないだろうか。

\*

この視察にあたり、住田町については日原もと子氏(東北支部)・佐々木建設課長・多田町長・小泉副町長他、また釜石市平田・遠野市穀町団地については西出当学会副会長・富安亮輔氏にお世話になりましたことを付記します。

## ■ 追悼の記

### 郷力憲治教授の急逝に遭遇し…

小宮容一(関西支部長・芦屋大学)

一昨年10月大阪樟蔭女子大学で開催しました日本インテリア学会第22回大会で、大会実行委員長を勤めました同大学教授郷力憲治氏が、この7月7日未明に急逝されました。享年66歳、まだまだこれからインテリア学会で活躍していただけたと思うと若いと云える年齢での永逝でした。

6月25日、ある会合の後、トイレで倒れられ、頭を強打され、救急車で病院に運ばれました。救急集中治療室で、懸命の治療を受けられましたが、意識が戻らないまま帰らぬ人となりました。

郷力氏との出会いは、30程前のある商業集積ビルでした。郷力氏は、当時乃村工藝社に勤務で、商業関係の設計・デザイナーとして、強者として名前が知れ渡っていました。私が個店舗2物件の設計者で、郷力氏がその商業集積の企画・設計・監理者又アートディレクターでもありました。何かと私の設計にチェック・指導を受けた

記憶が蘇ります。昼間は中々連絡がとれず、夜8時頃会社に電話してやっと捕まるといった、徹夜も常時といった仕事熱心な郷力氏でした。

その後、(社)日本商環境設計家協会の委員会で見学会・イベント企画や機関誌制作などご一緒しました。どんな難局でも人脈を使い、また自らも動いて最後まで遣り通すパワーを見せ付けられたものです。

乃村工藝社を退職と同時に大阪樟蔭女子大学教授ととなり、その機会にインテリア学会にお誘いし正会員となり、第22回大会へと繋がったのでした。お誘いしたには理由がありました。当学会で商業インテリアの分野の研究を担って欲しいと思っていたからです。今となっては叶わぬ事となりました。

葬儀のお別れの儀、お棺の足下に花を捧げ、頬に触れて「郷ちゃん、天国でゆっくりして下さい」と…

合掌

(本稿は昨年に載いておりましたが、今号の会報発行がなかなか出来ずに、この時期になってしまいました。会報発行の責任者より、心からお詫び申し上げます。)

### 菊竹清訓先生の訃報に接して

湯本長伯(九州支部長・九州大学)

本会会員ではないが、建築・都市・インテリアの空間設計で活躍された、菊竹清訓先生が亡くなられた。空間設計の世界では、誰一人として知らないものは無い、大きな存在であった。先ずは心から、お悔やみ申し上げる次第である。近年は、設計の仕事こそセーブされていたが、頻りに海外に出かけられ、近年伺っただけでも、ブルガリアの議事堂や、その他かなり重厚なプロジェクトのコンペの審査委員長などを、歴任されていた。

この数年間、九州大学でも客員教授をお願いしていた関係で、かなりお会いする機会があったのだが、いつも温顔でニコニコと(それが設計作業時には鬼と変じるそうだが)変わらず、お元気であった。私がお見かけたのは昨年の秋頃、東京四ツ谷のイグナチオ教会(先生はつい最近、洗礼を受けられた)であったが、その後も講演会などでお元気を拝見したという目撃情報があったので、まさにまさかのこと、青天の霹靂であった。お知らせした方々も、異口同音に驚きを隠されなかったのは、みな同じような情報環境にあって、ただただ驚くばかりであったことが窺われる。

昨年の12月26日に亡くなられたということであるが、4日までご家族が伏せておられたため、誰も知らなかった。4日にお知らせを載いて、しかも建築士会連合会が新聞に掲載するというので、慌てて各方面に連絡を入れ

る騒ぎとなって、何か慌ただしい中を割り切れない思いが募った。折しも森美術館では「メタボリズム展」が開催中で、新しく触れた若い人たちから、大きな関心が寄せられていたところであるだけに、ともかく残念である。3月にはまた九州福岡に来て戴き、「都城市民会館」保存活用の作戦会議とシンポジウムを予定していただに、まだ茫然としている毎日である。改めて、御冥福をお祈り致します。

## ■ 書評

湯本長伯（九州支部長・九州大学）

いずれも広報委員会宛てに献本戴いたものだが、学会に図書室がない以上、会員各位に読んで戴く機会がないので、会報に書評（読後評）を掲載して代えることにした。内容等の紹介は、広報委員会までお願いします（JASISeditov@yahoogroups.jp）

### 1) ①「ギフトド」天才の育て方

学研 杉山登志郎 岡南 山倉正意 著 2009年10月



### ②天才と発達障害—映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル

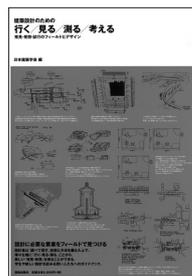
岡南 著 講談社 2010年10月（以上は、岡南氏から献本戴いたものである）



### 2) 「建築設計のための 行く見る測る考える—発見・発想・試行のフィールドとデザイン」

鹿島出版会 湯本長伯責任編集 川添登 遠藤勝勲 小原二郎 連健夫 加藤 力 松田奈緒子 白石光昭 ほか著 日本建築学会 建築計画本委員会 計画基

礎系運営委員会 情報設計小委員会 編著



### 3) 「邪馬台国論争の新視点」

雄山閣 片岡宏二 著



1) ①は、雑誌『実践障害児教育』に掲載されたものを、終了後にまとめ、加筆修正して出版されたものである。内容としては、アインシュタインやビル・ゲイツ、古くはミケランジェロ、ニュートン、バートランド、ラッセル、ヴィトゲンシュタインなど、天才と呼ばれるが能力に凹凸があり、知能はかなり高いが協調性に欠け、2つのことを同時にしたり、決められた通りに仕事することが苦手な、いわゆるアスペルガー症候群に属する発達障害の人たち、つまりいわゆる天才の診断（直視）と教育方法が書かれていると言って良い。しかしインテリア学会に大きく関わるのは、献本戴いた岡氏が主として執筆されている部分で、簡単に言えば、人間の能力の峰を区分すると、特に認知能力の面から見て『視覚優位・映像型』と『聴覚優位・言語型』に分類できるというものである。これは、どちらもという訳にはなかなか行かないものであり、従って簡単に言えば、「絵を見て理解する人」と「文を読んで理解する人」の2種類があるということである。評者は、40年以上空間設計教育に関わって来たが、学生のこの特性の違いについては、痛いほど分かっているつもりである。絵が描けず文章ばかりで叱られる学生、絵は上手いが説明の出来ない学生、どうやら能力は偏って発現するものらしい。ダーウィンのビーグル号航海記の読み解きや、偏っているとどうということが起きるかなど、興味津々の記述である。

②は①の書によって映像思考の存在に目覚めた著者が、視覚優位と聴覚優位の2つの詳細な事例研究によって、その特徴を明らかにしようとした書である。視覚優位の映像でものを考えるタイプの典型として、彫刻家・建築家A. ガウディを採り上げ、神奈川大学・鳥居徳敏

教授の協力で、彼の具体的な思考と行動例を考察している。建築家ガウディ研究としても面白く、彼の死の原因までも考察している。またルイスは、英国オクスフォード大学数学講師で執事（牧師の前段階）という聖職者でもあったが、児童文学者としても（アリスシリーズが有名）知られている。彼は聴覚優位で規則愛好者であり、細かいことに拘る性格であったが特徴的に吃音で、奥行き感を持たず、顔や表情の認知が出来ない『相貌失認』だったとしている。そうした特徴と彼の仕事を、一つ一つ関係づけて説明しているところは大変興味深い。評者は教育の中での経験を通じて視覚優位も聴覚優位も理解できるので、いちいち頷ける内容であったし、デザイン教育や自らデザイン実践をされている先生方、あるいは教えられる側の方々に、是非読んで戴きたい書である。

2) は、建築学会、情報設計小委員会の研究成果として、2011年11月に発刊されたもので、発見・発想・試行を重視する空間設計の方法手段と事例について書かれたものである。6章と序章、執筆者紹介から成り、第1章「発見・発想・試行を重視する第3の設計作業の考え方」、第2章「設計のフィールド・場所を読み解く」、第3章「フィールドワークからプログラムへ」、第4章「事例」(17例)、第5章「見る測る知る考える」、第6章「役に立つ文献の紹介と解説」となっている。序章はメタボリズム運動の中心となり、多くの名評論をものされた川添登先生の設計論で、現代の設計が変わって来ていることと、その捉え方、考え方が示されていて興味深い。一時の体調不良を撥ね退けて書かれたものである。全体に空間単位を繋いだり切り離したりしながら空間配置を行うという設計の第1の作業と、その空間がどう使われ、どのような意味を幾つかを考えるとという設計の第2の作業、いわゆる使われ方研究の2つに対置して、これらを行ったり来たりし、色々な発見と発想を試行しながら繰り返して、創造的な環境を創る方法・手段を事例が記されている。事例の中では、ふじようちえん（手塚由比・貴晴）、小布施まちとしょテラソ（古谷誠章）、ホテルドリームゲート<高架下の吊りホテル>（笠井香澄）、長谷木記念幹（荒井良之／内井昭蔵）、九大ビッグオレン

ジ・ルネット（石田壽一）など、一筋縄では行かないものが面白い。アンソロジーには、小原二郎名誉会長の研究履歴も書かれている。アレグサンダーが日本に持ち込んだパタンランゲージを使ったワークショップも紹介されている。

3) は、永年続く邪馬台国論争が、資料の採り方に偏りがあって、正確なものになっていないとして、昨2011年12月末に刊行されたものである。おなじみの魏志倭人伝も登場するが、読み解きが的を射ていて感心する。大方の研究・論争テーマは必ずしも円満な資料の採り方をしていないのがむしろ通常で、時に完全にグループに分かれて互いを非難する論争も多いが、この書はかなり幅広く資料を鳥瞰し評価しているので、その点も研究方法の参考になるだろう。結論は近畿説を捨て、九州説を採っているのだが、その資料の読み解きの過程が大いに参考になる。いずれにせよ、100のピースのうち、1、2、3くらいをいじって議論をしている古代史の話なので、結論の評価は急ぐ必要はないが、邪馬台国論争の歴史も客観的に振り返っているし、大いに参考になる。ちなみに評者は、九州大学着任以降も考察を重ね、畿内説→九州説→東遷説（神武東征・記紀伝説とも重ねて）と変化して来たが、我が国のルーツに関するこの研究テーマが吉野ヶ里発見以前と以降で大きく変わったことは確かである。そこに復元された12mの桜観が、魏志倭人伝にあるものそのものは未だ分からないが、100のうち2～3ではなく、4～5くらいには近づいたかも知れない。それでも眠っている遺跡の1万分の1くらいしか発掘調査されておらず、我が国の建築・都市のルーツの姿は、未だはっきりしない。

以上の2)、3)については出版社の定価（2,940円、2,520円）に関わらず、本センターでは、2,000円で教育・研究用として、お領けしています。関心のある方は、ご連絡ください（書評者：湯本長伯／九州大学産学連携センター・デザイン総合部門教授 interior@design.kyushu-u.ac.jp）。

## ■ 編集後記

湯本長伯（九州大学）

昨年4月・総会前に会報48号を発行してから、あっという間に9カ月経ち、もう次の総会前という時期になってしまった。従ってこの1年は、会報1号しか発行できなかったことになる。その間、それを補うべきメールニュースの発行も滞り、学会として誠に申し訳の出来ない状況になってしまいました。深くお詫び申し上げます。

学会としては、出来るだけタイムリーな情報共有が望ましいが、人的・財政的リソースの問題もあり、そこまで届いていないのが現状である。だからこそ、そこを個人的努力で乗り越えなければならないが、この10数年以上の中で初めて、会報が年間1号しか発行できなかったことに、改めて深くお詫び申し上げる次第である。

いつも時期遅れの記事ばかりになってしまうのも気が引けるので、今号には献本戴いた書籍の中から、面白いものを選んで書評を掲載した。特に岡氏の著書は、永遠の課題を突き付けているようで、誠に興味深い。今後も、種々の献本を期待しております。

平田圭子（広島工業大学）

日本インテリア学会第23回大会（広島）のまとめでもある会報49号が無事発行され、中国支部所属/大会実行委員でもありました私は、やっと一区切りついて安堵いたしました。

年末のお忙しい時期に原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にはこの紙面をお借りして深く御礼申し上げます。

### ■日本インテリア学会会報第49号（2012. 3. 23発行）

編集者：湯本長伯、平田圭子

発行者：直井英雄（日本インテリア学会長）

広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、渡辺秀俊  
若井正一、平井康之、平田圭子、  
白石光昭

### ■事務局（事務局の所在地が変わります）

日本インテリア学会

事務局 上野義雪

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学工学部デザイン科学科

上野研究室気付